

教も、畢竟は今日只今の心こそ用事のあることで、何にも來年から信心發す事ぢやの、明後年から道を學ぶのぢやの、來月からは身を慎むのぢやの、再來月から御法度を守るのぢやのこいふやうに、鰻を摺子木ですくふやうな教といふものは、何所にもありはしませぬから、人は只々今日只今の平常心、生死増減に與らぬことを能く明らめ、只此の心を恥かしめぬやう、大事大切に守るより外、仕様は御座りませぬ。

それで孔子が、御弟子の季路の鬼神に事ふることを問はれましたのへ、人に事ふることを御示しなされ、死の道を問はれましたのへは、生れた道を知れと御示しなされたものこ見えます。しかし私もかやうに御話には致しますが、兎角前に申した寢ばけもの、死にぞこなひの幽霊仲間、どうせ皆様よろしう御引導を御願ひ申します。先づ此の席はこれ限り。

心學道の話第六篇

「孟子曰く、命にあらざるなきなり。順にしてその正しきを受く。是の故に命を知るものは巖牆の下に立たず。その道を盡して死するものは正命なり。桎梏して死するものは正命にあらざるなり。」

是は孟子盡心の上編に出てある章で、即ち大賢孟子の語で御座りますが、是はやつぱり論語に出てある孔子の語に、「君子に三つの畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。」と仰せられた中の、最も一番大切な天命を畏るるの一條を詳しく説き示されましたものと見えまして、至極有りがたい章なれば、是を今日の御話の題に致しませう。

去りながら此の天命こいふことを、何も知らぬ小人凡夫は、何やら變なここのやうに心得て居るもので、下女のお三が棚元仕舞ひ居るに、昨日買つ

て棚の上へ上げて置いて置いた皿か鉢か、自然落して割れでもするさ、「ヤレ悲し
や仕舞うた。たつた昨日買った鉢が、はや落ちて破れて仕舞つた。アアエ
エ是も天命ぢや。」というたり、又「此の間の人殺は、それから後はどうした
であらう。」といふさ。「さればその事よ。直に逃げたといふことぢやが、天
命さいふものは恐ろしいものぢや。箱根まで逃げて行つた所、御上の御手
が先へ廻つてあつたゆゑ、其所へ着くと捕へられたけな。」といふと、「エエ
何ぢや捕へられた。アア是も天命ぢや。」などというたり、何でもその様な
思ひがけのないこゝに出會ふこゝの、漢名のやうなことにばかり心得て居
るものぢやが、此の天命さいふことは、是は中々其のやうな軽々しいこゝ
では御座りませぬ。誠に人たるものの第一に心得て居らねばならぬ、至極
大切なことなれば、女中方も若い衆も、とつくり心留めて御聞きなさ
るがよい。しかしながら今日の御話は、どうしてもチト堅うなりませうか

ら。睡氣が付くやらも知れませんが、その睡りの付く所をじつと辛抱して
御聞きなされ。

草風 集めて燈と
晋人 書を讀
みして爲に
温の爲に
擡せられ
後尙書に
部尙書に
孫康 家貧
晋人 家貧
なくして夜
を照らして
書を讀む
後史 大
夫と爲る

昔、唐土の車胤といふ人や、孫康さいふ人は、至つて身分の賤しい人で
あつたさうなが、晝は一日働いて、夜の休む間に書物を讀んで道を學びた
く思うても、貧乏で油を買ふことがならず、燈火をともしこゝが出来ぬか
ら、車胤は夏の夜に螢を大層取集つめて、その光で書物を讀んだといふこ
こもあれば、又孫康といふ人は、冬の夜に雪をもぐつて、その明りへ書物
をすかして見たといふこともあるが、それから見れば、此のやうな結構な
疊の上に座つて居て、人に讀ませて聞くばかりでなく、その註釋まで話さ
せて御聞きなさるといふは、何程樂なことやら知れませぬから、眠りの付
く位のこととは、煙草の粉を眼の中へ入れてなりと、又それが嫌なら尻こぶ
たをつめてなりと、辛抱して御聞きなされ。

扱先づ此の始めに、「命にあらずといふことなきなり。」というて有るは、凡て此の世界は何事であらうと、天命でないといふことはないものぢやこいふことで御座りますが、その又天命といふことは、どうしたことなれば、是は天の命令といふことで御座りませうぢや。しかしながらかういふても、此の天といふことを、元來世間の人が心得違うて居るから、ツイ女中方などで見ると、ハテ合點の行かぬことをいはしやる。天といふは大方アノ青い空の、星のある所のことであらうが、アノ遠い星の御座る所の天が、何時誰に何といふことをいひつけさしやるのであらう。そして又アノ虚空の天が物をいはしやつたり、口でも利かしやることがあるものであらうか、などと思はつしやらうも知れぬが、此の天といふことは、何もそのやうな遠い所の虚空を指していうたものではないぢや。

尤も近思録には、「大虚によつて天の名あり。」氣化によつて道の名あり、

天何をか言
論語陽貨篇
罪を天に獲
論語入脩篇
我を知るも
の夫れ天
論語憲問篇
天之を厭た
論語雍也篇

などというて、その理はあつても、影形もなく、目に見えぬ所で天といふ名を附けたものなれば、カノ天文ぢやの天色ぢやの、又天地ぢやのといふ時には、随分アノ遠い所の虚空を指して天ともいひませうけれども、惣體此のやうな儒書の中に、「天命ぢや」の「天道ぢや」の、又孔子の「天何をか言ふや。」と仰せられたり、又「罪を天に得ては禱る所なし。」の、「我を知るものは夫れ天か」。「天之を厭たん、天之を厭たん。」などと仰せられたやうに、天天というてあるは、何もあの様な青い空の星の見える所の虚空を指して言はしやつたことではない。アノ天というてあるは何であらう。此の世界を此のやうに、ピチ／＼活かして働かして使うて御座る所の、活きた主宰様のことぢや。

總じて此の世界は、何であらうと一ツ活きた主宰様がなければ、昔から此のやうに活きどほしになつて、晝夜働きづめになつては居らぬ。先づ

何時の世からか、アノ様に空にかかつた御日様や御月様を、チツトの間も息なしにスウリ／＼伸びたり、又雨を降らしたり、風を吹かしたり、稲光りをさせたり、神鳴を鳴らせたり、春は野山を青うさしたり、秋になれば赤うしたり暖めたり、冷ましたり濡ほしたり乾かしたりして、此の世界をピチ／＼活かして、働かし遣うて御座る活きた主宰様がなけらねばならぬが、その主宰様のことをさして、儒道では天といひますぢや。それから又主宰様を、神道では神も佛道では佛ともいひますが、それは只此の日本と漢土と天竺から假りに附けていふ惣名で、その又御徳を賞めていふには、儒道からは乾元ぢやの、太極ぢやの、無極ぢやのこもいひ、神道では國常立尊ぢやの、天御中主尊ぢやのこもいひ、又佛法では無量壽佛ぢやの、阿彌陀佛ぢやの、不可思議光如来ぢやのこ、イヤハヤ様々に賞めた名が付けてあるが、何にもそれ／＼別に變つたものがあるのではないのぢや。一

乾元易の
こと天道の
太極易の
語天地未
以前のこ
無極又唐
宋の周濂溪
の語順和尙
の杜順和尙
物の名もの
歌の名もの
大阪にて伊
勢では濱伊
勢といふ名
の土／＼名
がいろ／＼を
異ふことを

休和尙の歌に、

物の名も處によりて變りけり

難波の芦は伊勢の濱荻

それに此の凡夫といふものは、そのやうに名がいろ／＼變つて附けてあると、どうやら夫々別々に變つたものがあるやうに思ふから、それでつい色々な争ひごこちが起る。それは畢竟幼い時から、只その名三字を聞き覚えて居るばかりで、肝心なその活きたものがまだ見えぬから起ることぢや。それで又一休和尙の讀まれた歌に、

名に迷ふ人の心のおろかさよ

食つて知りたまへおはぎ牡丹餅

成程お萩といふと牡丹餅といふとは、大きに違つた名ぢやけれど、その物と味ひに何にも違つたことはない。又是を皆さんの方の身でいうて見ても

餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩
餅はぎは萩

阿字佛法
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛
楚語阿佛

同じことぢや。御銘々の身はたつた一人でも、向ふへ立つ人々によつて、
いろ／＼に名を附けて呼びませうかの。しかしかういふに、此の中に、イ
ヤ私が名は萬屋萬兵衛と申して、たつた一つしか御座らぬといふ人があら
うも知れぬが、サア萬屋萬兵衛といふ名は、世間通用の惣名で、たつた一
つぢやけれど、その萬兵衛殿に向ふ人々によつて、いろ／＼に名が變はる。
先づその萬兵衛殿の親にいはせたら、息子といはつしやるであらうし、
又その萬兵衛殿の子にいはせたら、親父というであらう。又その兄にいは
せたら、弟というであらし、弟にいはせたら兄というであらし、女房にい
はせたら夫といふ名、家來からは主人といふ名、伯父伯母からは甥といふ
名、姪からは伯父といふ名、婚からは舅といふ名、舅からは婚といひ、幾
らも名があるやら知れぬが、その萬兵衛殿はたつた一人ぢや。
丁度それと同じことで、たつた一つの此の世界の主宰さまを、詠める方

や、又その御働きのなされ處で、いろ／＼に名を付けていひますが、その
名に何にも用はないから、名は何となりと銘々の好きな名にして置いてよ
いが、此の世界は何であらうに、その活きた主宰さまから命令を受けてに
よつて、此の世へ生れて出た。その生れ出た生勢の續く間を、佛法では阿
字もいへば、孟子はそれを浩然の氣ともいはれて、その間を命として寢
たり起きたり、喰つたりはこしたり、呼吸動靜起居語黙し居るうちに、つ
ひ死んで仕舞ふ世界なれば、そのハアスウの續てやうの長いも短いも、
位の高いも低いも、幸運なものも、微運なものも、皆悉くその天の命令でな
いことはないものゆゑ、それで爰にまづ孟子が「命に非らずといふこと莫
きなり」といはれましたものぢや。
物は何でもそれ／＼の生れ合ひ、天命のあることなれば、何であらうと
その天命の通りを大切に守つて居るより外に、仕様はないものぢや。そり

したかりけ
れはとあ
る。くそ
又は、うん
こといふに
同じ。

やアノ庭に出来る草木なきの事でも考へて御覽じませ。黄揚ぢやの杜鵑花
ぢやの、南天燭ぢやのといふやうなものも、木に違ひはないけれど、あれ
等はあれだけの天命ゆゑ、なんほあれが大きうならうと力みかへつても、
迎も梅の木や桃の木の様な大きな木になることも出来ず、その又梅の木や
桃の木が、おれも根もあり葉もあり、枝もあるものぢやから、おのれ一番
大きうなつて見せうと、あれがなんほ力んでも、とても榎の木や楠木や、
檜木のやうな大木にはならぬ。

又草の内でも、蘭ぢやの萬年青ぢやの、石菖蒲ぢやのといふものは、ど
うした生れ合ひのよい草やら、結構な鉢へ植ゑられて床の上へ上げられ、
人に賞翫せらるるが、それに比べて見ると、御互に日々たべる此の煙草と
いふものも、是も草に違ひはないが、エライ生れ合ひの悪い草で御座りま
すぢや。これは此の江戸の御方などでは御存じはあるまいが、先づ生え出

つづだんず
切ること
いふんぢとも

るから頭を切られたり、手を切られたりして、ちつとも我が儘に枝葉を伸
ばすこともならず、やうく一本の木へ葉を十枚か十四五枚ばかり残され
て、しやうことなしに葉を大きうに出来すも、その葉はぢきに切取られて、
百姓家の火爐の上へ釣下けられ、下から煙でブウ〜くすべ立てられ、據
なう赤葉になると、それから引きおろして繩で縛られ、御當地のやうな
所へ引出されると、煙草屋の切盤の上へ乗せられ、庖丁でつんずに刻まれ、
その果は火あぶりぢやが、何と同じ草の中にも生れ合ひの悪い草もあるも
のぢやな。

しかしながら煙草はそれに何ごも思はず、只天命の儘に身を任せきつて
居るゆゑ、丁度それだけ、上は天子將軍様から、下萬民に可愛かられ、ど
んな御客の座敷でも、マア萬年青を御上りなされども、石菖蒲を御吸ひな
されともいひませぬ。御茶より先へ座敷へ出て、先づ御煙草と賞翫せられ、

菅原道真の
菅丞相の
こと大臣は
と大臣は
右大臣は
つた人故に
いふ。い
い。い。い
一番最も
語の意、俗

人に愛せられる。その段になつては、又中々蘭や萬年青や、石菖蒲の鉢植

どころではない。人にもてはやされる。
人も丁度その通りなもので、昔の菅丞相様はあれ程の御徳の高い御方
であつたが、悪人の讒言によつて、遠い筑紫の國へ左遷に御逢ひなされ、
遂にその國で御果てなされたけれど、御生涯の御徳が餘り勝れて御座つた
ゆゑ、後には天満宮といふ宮號までも下され、今では何にも知らぬ子供ま
だが、天神様というて崇め奉る。さう見ると人は只只銘々の生れ合ひのあ
ることを知つて、餘所外を羨まず、只我が受け前の道を大事大切と勤めて
居るが一つちよい。一休和尚の歌に、

わが役は心に入らぬ役なれど

天の作者の差圖是非なし

成程百萬石お取りなさる御大名様ちやとて、どうぞおれは、百萬石の大名

に生れたいものぢやと思召して、百萬石へ御生れなさるのでもなげねば、
おれは農人に生れたいものと思つて、農人に生れて來るのでもなし。おれ
は士がよいの、おれは町人が好きぢやの、イヤおれは男に生れうの、イヤ
わたしは女にならうのと、何ぞ素人芝居か茶番狂言にでも出るやうに、こ
ちらから好きこのんで生れ出る世界ではない。皆それ々の天の命令を受
けて、生れ出る世界なれば、たとへどの様に位の高い人でも、身上向の大
きな人でも、利口な人でも、發明な人でも、生死のことはいふに及ばず、そ
の外のこと何事でも、その天の命令の通りを眞直に身に引受けねばならぬ
ことゆゑ、それで爰に孟子が「順にしてその正しきを受く。」といはれまし
た。是はかの俗にいふ、何事もあなた任せ、天道任せにして居にやならぬと
いふことぢや。爰が大事な所で、銘々此の本心の修行して、誠の活きた天
命といふことを知らぬと、そのあなた任せ天道任せにいふに、大分間違の

出来ること御座りますちや、なぜといふに、誠の活きた天命といふものを知つて、銘々我が勤むべき道をば十分に勤め盡して、その上での幸不幸、天道任せといふものちやけれど、誠の活きた天命の道が知れぬも、その我が勤むべき道をば碌々勤めずして、年中のらくら遊んで居てさうしてあなた任せちやの、イヤ天道任せちやのというて居る、それは丁度舟乗りが日和をも見ずに大海へ舟を乗出して、あなた任せの天道任せのミいうて居るミ同じことで、危いここの天上ちや。

さるによつて人は只此のハアスウの主を知つて、考きた天命といふものを知り明らかめねばならぬことで御座りますちや。

さうないとどんなえらい人であらうと、此の天命の正しきを請けることが出来にくい。それを一つ生死のことでいうて見るも、此の世へ此の身の生れて出る方のこゝは、まだ此の體の中のことちやによつて、前にいふ通

曾子、孔子の門人、孝行の門と。曾子のこ

りの誠のあなた任せ天道任せで、此方からちつとも自力の御手傳すること出来ぬが、死ぬる方のこゝには、モウ此の體の出来てから後のこゝゆゑ、銘々如きの小人は、大分此方から御手傳することが多い。

そりやなぜといふに、昔の孔子さまや顔子や曾子のやうな御方は、第一身の行が正しくて、萬事の慎みが深く、身の養生に無理をなさらぬゆるこりや皆天の命令だけの命数を全う御保ちなさるであらうが、その外の小人凡夫は、中々天の命令だけの命数を全う保つことは出来ぬ。そりやなぜなれば、今日の行に様々な無理をして、それに心を苦めたり、成らぬことを成らさうとして、それに心氣を費したり飲み食ひをほしましにして、いろくの病を發したり、若い時には美しい體の中へはまり込んで、やはらかいといふ貝で命を削つたりするゆゑ、どうであたりまへの天命数を二年縮めるか、三年縮めるに違ひはない。

醫・の・中・へ・は・
 ま・り・込・ん・で・は・
 美・人・な・ど・に・
 う・つ・と・を・扱・
 か・ふ・こ・と・を・
 い・ふ・
 や・は・ら・か・い・
 と・い・ふ・か・い・
 貝・に・か・け・
 し・や・れ・た・の・
 て・あ・る・
 と・は・餘・り・
 ひ・は・た・り・
 ひ・は・た・り・
 ひ・は・た・り・
 火・袋・の・
 火・を・包・ん・
 火・足・の・立・
 る・も・の・に・
 ぬ・や・ら・
 る・も・の・に・

七二八
 それで爰に又孟子が御深切に、「命を知るものは巖窟の下に立たず。」とい
 うて置かれました。

此の巖窟といふは、大きな石で高く築上げた石垣の、今も崩れ落ちんと
 するやうなあぶなげな所のことぢやが、そのやうなあぶなげな所へは、誠
 の天命を知つた君子は決して立寄りぬといふ。こりや孟子の譬へ言葉ぢや。
 人の生命といふものは、アノ蠟燭へ燈した火のやうなもので、アノ蠟燭
 は天命の様なもの、燈火である火は命の様なものぢや。そこであの火を長
 く保たさうと思へば、まはりへ火袋でもかけて、風の當らぬやう、随分大
 切に用心して置けば、蠟燭の天命のありたけは點つて居るに違ひはないが、
 それを火袋の心遣ひもせず、風吹きへ突出して置いて、蠟燭の端へ流れる
 もかまはず、やりばなしにして置けば、何れ火の點つてある間も短いに違
 ひもないが、その上にまだ悪くすると、その蠟燭の天命はよつほどありな

がら、中途で風に吹消されたり、又いろ／＼な蟲にとられたりするやうな
 ことが、幾らもあることやら知れぬぢや。そこで爰にいうてあるやう、命
 を知るものは巖窟の下に立たず。とよつほど今日を用心せにやならぬこ
 ぢや。

昔、孔子様は魯の國の城の門を御過ぎなされる時、その門の脇にある高い
 石垣が、古く崩れかかつて傾いてあつた所、孔子はその石垣の下を御過ぎ
 なされる時には、身を縮めてツイミ走つて御通りなされたといふことぢやが、
 その時御側について居らるる御門人がいはるるには、「アノ石垣は昔よりあ
 のやうに古くから傾いてある石垣なれば、何もそのやうに御恐れなされるに
 は及びますまい。」と申上げられたれば、孔子様が仰せらるるには、「イヤお
 れは又古く傾いた石垣ゆゑ、尙以てあぶなう思ふ。」と仰せられたといふこ
 とぢやが、何ミ聖人といふものは、エライ身を御大切になされるものぢやな。

そりやなぜなれば、此の身は元來忠孝仁義の爲に生れ出た天命の大切な體といふことを、能く知つて御座るからのことぢや。しかしそれに就いて、唯今皆様へちよと御尋ね申すことが御座りますが、外のことでは御座りませぬ。只今御前さん方や私等が身に、銘々持合せして居るものの中で、いつち大切なものは何で御座りませうな。

尤もそこに着て御座る衣服ぢやの、腰の物ぢやのといふものは、これはその御銘々の體に比べて見れば、何でもないものぢやから、それらは皆放つて仕舞つて、その體中で吟味して御覽じ、頭であらうか手であらうか、足であらうか眼であらうか、鼻であらうか耳であらうか、口であらうか、一つく吟味して見るこ、皆入用な道具で、大切なものに違ひもなく、又眼の代りを耳で濟さうといふことも出来ねば、口の代りを鼻で仕ようといふことも出来ぬもの故、どのやうな貧乏な人であらうこ、欲の深い人であ

らうと、お前の眼を片眼金千兩で買ひませうから、賣つて下さらぬかといふたとして、減多に賣るものでは御座りませぬが、さう見るこ、お互の此の體といふものは、一々金に積つて見るこ、實に何萬兩にも代へられぬ、大切なもので御座りますが、その又何萬兩にも代へられぬ大切な此の體も、此のハアスウくの命がなければ、そりや又何の役にも立たぬもので、一日も茲へ置くことも出来ず、何れ焼いて仕舞ふか、土へ埋めても仕舞はにやならぬが、さう見ると即今茲にお互に持合はして居るものの中で、いつち一番大切なものは、此のハアスウくの命で御座りませうかの。さういふ大切な天命の命なれば、一日も長く保つやうに大切に守つて居らねばならぬことゆゑ、命を知るものは藏體し下に立たずで、随分あふない所へ立ち寄らず、あふないことをせぬ用心せねばならぬこぢや。しかし又かういふこ、何にも知らぬ女中方や子供衆は、カノ芝居にする

●莊五郎
●此の道
●野拾遺
●行のこと
●日附は
●二年五
●とあり

忠臣蔵の、斧九太夫や定九郎を見るやうに、滅多無性に命を惜んで、出るべき場所へ出會もせず、爲すべきことをせぬといふことかと思ひなさうも知れぬが、そりや又大きな間違ぢや。なぜいふに、人の身の上では前にもいふ通り、命ほど大切なものはない。大切な命のままに能く勤めるが人の道ぢや。

惣じて此の道と命は元來一つもので、何も別々なものではないけれど、分けていふと、道は萬古不易の道で幾萬々年も易らぬもの、命は此の體一代のものなれば、命より重いものは道ぢや。去るによつて、爰に孟子が念を入れて、「その道を盡して死するものは正命なり。」と示し置かれましたが、何と御深切なことぢや御座りませぬか。

昔、楠正成公は攝州港川にて討死をなさる時、子息の莊五郎どのといふ御方へ、御遺物の品をお贈りなさるに、御書置をなされ、御家來の筆

●尙々書
●外に小
●尙々云々
●書き添
●追伸
●燒野の
●雉子を
●子育て
●に野が
●身焼く
●も子づ
●居を離
●で、子
●つくと
●ふこと

人といふ人に持たせて、御内へ御歸しなされたといふこぢやが、その書置の文に何と書いてあるぞといふと、

此度隼人差遣はし候儀別儀にあらず、我等最期も近々覚え候。願くは貴殿成長の器量見届け度候得共、義の重きこゝ更に遁れ難し、彌々勤學怠りなく、成長の後我等心中可被察入候。恐惶。

とばかり書いてあつて、楠莊五郎殿、同兵衛と御書きなされ、又尙々書に

尙々此の巻絹一疋は公より拜受、是足は祖より我等まで着古し候得共、永き遺物と贈り候。

と書いてあるが、何と泪のこぼれたことぢや御座りませぬか。

凡そ生あるものに子を思はぬものはない。燒野の雉子、夜の鶴も子を思ふがゆるゑの辛苦、まして人として子を思はぬものはなけれども、最早討死

●白●夜●の●鶴●
●に●な●る●鶴●天●の●詩●
●鳴●籠●と●思●子●
●ふ●よ●り●い●あ●

ご御覺悟をなされた時には、跡へ御残りなさる御子様方のことを思召し出されいで何とせう。嗚その爲には何時までも生延びたう思召したであらうけれど、義の重きこと更に遁れがたしとあるので、道といふものの重いことを考へて御覽じ。いかにアアいふ智仁の勇將ぢやきて、死にたい御命ぢやないぞ。死にともない大切な惜しい命ぢやけれど、忠義いふ道へ比べて見ると何でもない軽いものになるのぢや。

「命は義によつて輕し。」といふもそのことで、畢竟道を行ふが爲の命、命をつながうが爲の道ではない。ソナナラお互に此の命のあらん限り、親には孝行、主人には忠義、夫婦は和合、兄弟は睦しく、他人の交りには信實を以て交るが人の道ぢやによつて、勤めぬかねばならぬことでは御座りませぬか。チトマア考へて御らうじませ。

しかし此のやうにいふと、どうやらかういふ私は、よつほどえらいもの

で、その通りの人の道を、カ一ぱい勤めるもののやうに聞えますかも知れませぬが、中々私はさやうなものでは御座りませぬ。誠につまらぬ無調法もので、何をさせても埒の明かぬ男なれば、かやうな御話を皆様へ致しますも、實は甚だお恥かしい譯なれど、是を例べていうて見ると、體の弱い氣の弱い男が、伊勢参官を思ひ立つて、同伴の人を誘ひあるくと同じことで、實に信心があつて参る氣のものならば、無理に同伴人を誘ひあるくには及ばぬ譯なれど、そこが病身な弱味喰の悲しさ、参りたい氣は山々でも、外に同伴の人がないと、さうやら心細いやうな氣がして、どうしても一人立つて内を踏み出す氣にはなりませぬのぢや。

それでマアあちらこちらと同伴の人を誘ひあるき、よい同伴を一人なりともたんと拵へて、その同伴を勢に自身もあずりく参らうかといふやうなものでも御座りますぢや。それで折々は我が身に覺えもないやうなことを

も、口に任かして言散らす言過しも御座りませうが、ソコハマア堪忍して御聞き下され。

扱マアそれはそれにして、此の凡夫といふものはをかしい気なもので、家業を精出して家が繁昌するか、奉公を大切に勤めるので次第々に立身するか、身の分限を守つて居るので思ひの外金銀が溜るか、萬事を正直にして居るので世間の人に可愛がられるか。さて又女房持つて子が出来た所、その子も無事で成人するか。何時の間にやら元服する。程なくそれへ嫁を取り、玉のやうな孫が出来る。その代り祖父様は、去年の春死なれたが、あれは八十八であつた、祖母様は今も達者で、此の内京参りをせられたが、昨日無事で歸られた。

扱貸したものは約束通り間違ひなく戻つて来る。家來も大勢ある所、どれも揃うた正直者、追々仕入れた代物も次第々に捌けて行く。掛の金銀

陰徳の陽報
准南子の陰報
徳あるも陰報
は必ず陽報
ありとあり
餉の鳥買
餉の鳥買
を拵へて賣
つて歩くそ
れを買ふを
いふ何れ
ら九歳のり
十歳よりの
子供の何れ
でその荷が
人の重荷を
負うて貰ふ
て貰ふに
のてあふ
ち。關西の
が。あんな
だ。あんな

も端から約まるといふやうに、物事が何事も順にいつて仕合せのよい時には、誰でも此の天命といふことは、思ひ出しもせず、言出しもせず、只おれがくで居るものぢやが、サアそれが變に來て、焼けるか倒れるか、煩ふか貧乏するか、損をするか女房に離るか、子を取らるか、何ぞそのやうな不時な難儀なことに逢ふと、その時俄に此の天命といふことを思ひ出していふもので、「アア此方の内に此のやうなことはありさうもないものぢや。」の「あれの家にあのやうなことはない筈ぢや。」のと、何ぞ前からあつらへて置いたことが、俄に間違つて來たか、死んだ人が蘇生つて戻りどもしたやうに、狼狽へさわぐものぢやが、それが皆カノ活きた天命といふことを知らずして、カノ積善の餘慶ぢやの、陰徳の陽報ぢやのといふことを、何ぞ一文の錢出して、餉の鳥買が重荷を負うて、その駄賃を貰ふことやうに心得て居るから發ることぢやが、そのやうな交易する氣で善いこと行

うたり、慈悲善根を勤めるのは、後には門立の乞食に一文の錢やつたり、一碗の飯をやつたことまで數へ立てて、その報をモウ來るかモウ來るかと待つて居るであらうが、そのやうな賤しい欲心があつては、逆も誠の道に到ることも出來ねば、天の冥慮に適ふわけはないから、マア、そのやうな交易する氣は丸でやめて、只におのれが受前の道を大事大切に勤めるがいつちよい。さうさへして居れば、何れにしても悪いことはないものぢや。

その上また善いことすれば善いに違ひはなし、悪いことすれば悪いに違ひのないのは、天理自然の常といふもので、たとへていふと、火は熱うて物を焼くが火の常、水は冷たうて物を潤すが水の常といふやうなものぢや。たましく善人の不幸にあつたり、悪人の幸にあつたりするのを見て、あれを見れば、善いことすれば善いの、悪いことすれば悪いのといふは間違ぢ

上、お上のこと。政府のこと。仲背、米俵などをかつかつぎの人。究、丈夫の強いこと。

やといふは、丁度夏の夜、空を飛ぶ陰火といふものの、薬屋の屋根なごへ落ちて焼けぬのを見て、火は熱うて物を焼くものぢやといふ、嘘ぢやといふたり、箱根なごの温泉へ這入つて見て、水は冷たいぢやといふは、大きな違ひぢやいふと同じことぢや、それは物の變といふものなれば、常の方の規矩にはならぬことぢやが、とかく此の小人といふものは、その變の方へ眼を付けて、常の方をば見向きもせぬものぢや。それで孔子は僥倖を仰せられたが、僥倖とは俗にいふこぼれ幸を願ふといふことぢやが、此のこぼれ幸の規矩にならぬことをちよ御話し申ませう。

これは近頃あつたことで御座りますが、或國の上の米藏に米が大層積んである所、ある日その處の仲背が多勢寄つて、その俵を外へ持出しますに、その藏の入口片方に高く積み上げてある俵の下に、別に一俵外へのぞき出て居る俵があつて、その俵が多勢の仲背の俵運ぶ邪魔になつてならぬから、

はまてがて
あてがて
置くもの
はせもの
物と物の
間にはさ
たるもの
のさきも
可愛いこ
かあいき
ふに同じ

平本ひて
かひせら
判然せし
が然平げ
くつたて
うとてあ
らたとい

中に一人吉六といふ三十ばかりの究竟の仲背が見て、此の俵は足下の邪魔になるから取つて退けるがよいといふを、仲背頭の忠兵衛といふものが聞いて、

イヤ〜それは定めて上の俵の積みやうの工合どもが悪うて、用心の爲にそこへ一俵はませてあるやらも知れぬから、マア〜邪魔にならうとも、そのまま退けずに置けといふを聞入れず、かの吉六が力に任せて、その俵を引抜きましたら、忽ち直に千俵ばかりの俵が、どうした工合になつて居たものやら、一度にどつと崩れかかつて、その吉六は丸ですつぷり俵の下へ敷かれて仕舞ひましたが、かやうなごも折々は人藏のある所にはあることぢやけに御座りますが、始め此の吉六も、仲背頭のいふことを聞いて、入らざる腕立てをせねばよかつたに、何の是ばかりのはせものが、何の足になるものかといふやうな迂濶な心から、力に任せて抜いたゆゑ、ツイそ

の通りなえらい目に會ひました。

さてそれから大勢の仲背どもが、「何でも可愛いことをした、定めて體は碎け平けて居るであらうから、一刻も早く上の俵を退けてやるがよい。」というて、かの崩れた俵の上へ數十人の仲背が上つて、エイサ〜で一俵づつ退けて居る中、凡そ俵の百俵ばかりにもなつた時、フト見ますれば、足下の俵の間に、かの吉六が足先が見えますゆゑ、「ソコデやれ吉六は茲に居るぞ。」というて、多勢寄つてその俵を除けて見れば、吉六は誠に工合よう、俵と俵の合掌立になつて居るその間へ、横に挟まつて居たゆゑ、左の足を少し違はしたばかりで、外に何の痛所もなく、命も不思議に助かりました。何と僥倖なごももあるものぢやな。

昔からそのやうな大層な俵物の下に敷かれて、命を助かつたものはないけな、此の吉六は僥倖と俵の間へ工合よう挟まつたゆゑ、そのやうに遇

合掌立
て立ち居
るに居る
は、後がそ
の居るに
居るに居
るに居る
ふ。

命を助かりましたが、これが正眞の徳伴といふものなれば、規矩にはな
らぬこぢや。此を規矩にして他のものがそのやうなあふないことすると、
いつでも體は碎けて仕舞ふ。それぢやによつて、マア／＼そのやうなこほ
れざいはひを標にせず精出して、親には孝行し、主人には忠義をし、銘
々の家業を大切に勤め、御法度を大切に守つて、萬事を正直にして居るの
が最よいぢや。

さうした上での貧富盛衰、幸不幸はそりや皆銘々の生れ合ひにあること
なれば、此方の自由はどうしてもならぬぢや。その上又道があつての幸福
不幸は、どうあつても心に苦しみがなから、たとひ天死するとも生きた
甲斐があるといふもの、又道がなくて滅多無性に長命すると、その長命の
御蔭で、子にも孫にも會孫にまでも死後れて、後には世間の人にまで、イ
ヤ死にぞこなひぢやの、娑婆ふさげぢやのこいはれ、寄付く所のものに嫌

遇合不遇
丁度よく出
合つて世に
繁昌する
と、不仕合
せで、不甘
行かないの
こと。

がられて、難儀な苦しみをせにやならぬ。それでは何時まで生きても活き
た甲斐はないぢやないか。

さう見ると人の長命も道があつてからのこぢ。道がなくての長命は、長
命する程苦しみが増して来るから、反つて大きな不幸といふものぢや。そ
れに又人の身の上からこそ、命が長い短い、遇合ぢやの不遇ぢやのとい
ふけれど、限りのない天道様の眼から見ると、丁度水の上へ結んだ泡が、
大きかつたの小さかつたの、長かつたの短かつたのといふと同じことで、
眞の謔言といふものぢや。

惣じて此の世界は無常變易が常になつて居る世界なれば、たこひ堯舜の
やうな聖徳があつても、逆も千年萬年の壽命を保たうといふことは出來ず、
長い所が七十か八十年、百年には足不足の命、それを一年三百六十五日で
積つて見ると、百才まで生きた所か、日の數がたつた三萬三千五百日ほか

山坂の多いところへ
波のたつていふ朝に道を開いて
論語にあり仁の

七四四
ないが、それでもその内が今年三十才になる人なら、モウ一萬六百日は引けてあり、五十才になる人なら、一萬七千七百五十日はモウ引けてあるといふものなれば、残り僅か二萬日には足らぬ一生、それも是の百才まで生きる積りのこごぢやが、況して七八十才を一生とする人なれば、残りの日の數は一萬日には足り足らずの命ぢやが、そのマア僅の境界を、道を知らずにあくせく苦しんで、滅多に死急ぎするよりは、道を知つて一日なりとも今日を安氣に暮し、生きられる命だけは生きて樂しむが最善い。さりわけ御若い御方などは、是から前の道中の餘程長いことなれば、その間山坂にはいろくなこごもあらうから、早く此の門へ御入りなされ、本心の修行して、誠の生きた天命といふものをお知りなさるがよい。孔子様も、「朝に道を聞いて夕に死すも可なり。」と仰せられて、道を知れば活きた天命が知れるゆゑ、成ることは成る、成らぬこごは成らぬとい

眞宗の浄土
と親鸞の上
人を開祖と
する
張付紙な
ごで棚板
などに張
り付ける
と
佛前に釣
せる輪製
の

ふことを、心に明かに決定が出来るから、たごひその儘其所に死するごも、思ひ残すこともなく、その上我と我が手で壽命を縮めるやうなごもせねば、一代の道中が駄賃少なに通られる。さうないご色々なごにかかつて、大切な天命の體を何でもないごに果して仕舞ふ。それで人は位が高うても低うても、本心知つて、銘々の生れ合ひのあるこごをとつくりご決定せねばならぬごごぢや。その又それぐの生れ合ひ分限のあるごごを今一つたとへて御話し申さうなら、人の家の内にある佛壇といふものは、何處にでも綺麗に飾り立ててあるもので、近頃眞宗の佛壇などで見ると、内の張附は惣金張附にして、中の上段には結構な掛物もかけてある。脇の方には結構な花活にいろくな花を活けたり、又眞鍮の輪燈やら、鶴龜の臘燭立やら、香爐やら香臺やら、それはく結構な道具を揃へ立て、常に名香の薫りを絶やさぬやうに

分限者、金もち、身代よきもの。浮過ぎもの。一定の収入の活するも。

するゆゑ、誰でもその前へ行くと、頭を屈めにやならぬやうな位の、尊い所のもので、是を人の身上にたゞへていうて見ると、丁度マア上々様方の御暮しか、又は下々で言はうなら、金銀も家財も仕様のないだけ持つて居る、分限者の内を見るやうなものぢや。

又同じ一軒の家の内にあつて、同じやうな一間が半間かのもので、是より下の賤しいものはないといふ位のもは、何ぞいふと、ソリや尾籠なことがぢやが、雪隠ぢやが、是も人の家には一日もなくてはならぬ大切なもので、調法するものなれど、前の佛壇に比べて見ると、それはく位の賤しい汚穢いもので、此のやうな席ではチトお話しにもなりにくい位のものぢやが、是を人の身の上にとへていうて見るに、それは誠の一文持たすの貧乏人、その日稼ぎの浮過ぎものを見るやうなものぢや。

さてその通り貴賤上下を論じて見ると、佛壇と雪隠とは、そのやうに途

且那寺の施主となるもの。信仰歸依のし居る寺のこと。しつらふこと。しつらへる

方もない違ひやうぢやが、一軒の家の内にあつて、今日用を足し人を助ける所の徳を論じて、その徳に何も貴賤上下はない。

そりやなせいふに、何ぞ内輪に志しことどもあつて、且那寺の和尚を請待し、御經でも讀んで貰はうといふ時、位牌でも飾つたり、佛像でも掛けたりするには、そりやどうも佛壇でなければどうもならぬ。その時には逆も雪隠などがどのやうに綺麗にしつらうてあつても、逆もその所へは出會はれることではないが、それからその御勤めごとも濟み、後で餅やら菓子やら御膳やら、さまざまの御料理を出して、その和尚をもてなす所、和尚も御腹の工合もよくて、その御料理もしたたかにしてやらつしやり、何か咄して御座る内に、追々お腹がめぐつて来るに、ユリヤちと尾籠なこごなれど、どうやら彼の所へ行きたうならしやるぢや。

さうするに次の間へそつと立つて、袈裟をはづしたり、衣を脱いだりし

散寄の湯をす
 茶のたぬの小
 さき庵
 茶寮
 我苦與樂
 苦を拵き樂
 を與へると
 いふこと
 て、衆生を
 濟度するこ
 と

て、あちらこちらを見廻はして御座るを、亭主見附けて、「モシあなた。ど
 ちらへ御座りますぞ。」といふ。こ、「ハイちと用事に参りたう御座る。」といは
 しやる。「そんなら誰ぞ御案内申せ。」といふ時、勝手から氣の利かぬ男が出
 て、「ハイあなた様の御用事なら、定めてこちらで御座りませう。」というて、
 佛間へも連れて行つて見たがよい。いかな和尚でも肝を潰して「イヤ拙
 僧が参りたい所は爰では御座らぬ。此のやうな結構な所が今何の益に立つ
 ものか、どうぞ用場へ御案内下され。」といふに違ひはない。

サアその時には、ごんな結構な金張附の佛壇があつても、唐木造りの數
 寄屋があつても、逆も間には逢はぬから、有りがたいことも勿論ないこと
 もありはせぬで、只尻をすぼめて、ウロ／＼ウロ／＼迷はつしやるに違ひ
 はないが、その内にいよくはづんで来て、モウ／＼たまらぬやうになつ
 て來ると、せうことなしに庭へ飛び下り、裏の方を見廻はして、下雪隠でも

仰いで天に
 愧ぢず云々
 孟子盡心章
 の上篇にあ
 る語であ
 る
 佛器を佛へ
 供物を盛る
 に用ふる皿
 の、如きも
 の、多くは
 輪、細工な
 り

見附けられたら、その時の喜びはどんなものであらう。「ヤレ／＼有りがた
 や。」とこの内へ駈込ましたるに違ひはあるまい。それから内で用を足して、
 今迄の苦患を遁れ、大安樂を得らるるは、そりや全く雪隠の御蔭なれば、
 やつぱり雪隠にも拔苦與樂の大功德は具へて居るといふものなれば、その
 徳に於ては、何も賤しいのきたないのといふこゝにはないものぢやから、雪
 隠もその天に受けた雪隠の徳を失はず、入來る人を日々助けて居さへすれ
 ば、それでそのまま、「仰いで天に愧ぢず、俯して人に愧ぢず。」といふもの
 で、矢張り尊いのに違ひはないに、その雪隠めが天命の道知らぬと、そ
 の我が尊い徳のあることは知らず、折々佛壇どのの方を見て來ては羨しが
 るぢや。

「アア佛壇ごのは結構なものぢや。内の柱は惣金張附にして、床には何時
 でも結構な掛物もかけてある。眞鍮の花活やら、鶴の臘燭立やら、御佛

打敷に作
布帛にて
敷くもの
佛に供
するもの
臺に敷く
もの
類の機掛
の

渡瓶に置
座敷に置
て小便を
するもの
人なごの
しるもの
びん

金欄の板
錦の横に
あつて平
類の横に
金糸を交
て、種々
模様を織
したるも
の。古は
來し、今
京都市に
出すが、
片羽者
かたは
もの、不
具

器ぢやの打敷ぢやのと、終にこちの内では見たこともないやうな道具を並べ立て、常に香のかをりを嗅いで、何一つ不自由のないやうな暮しをして居らるるゆる、立寄る人が皆叮嚀に頭を屈めて敬はれるが、それから見ればこつちの内は淺ましいものぢや。同じ仲間のものでありながら、年中人に踏へ付けられ、常に不淨を入れられて、不淨所くと賤しめらる。

それに又渡器ぢやの渡瓶ぢやのといふものは、此方の別家のものなれど、それは反つて夜るくは上々方の御座敷へも召されるこやらいふことぢやが、此方は逆もその様な高上りするこもかなはず、アア淺ましい身の上ぢや。どうぞ牛涯の思ひ出に、佛壇どののやうな暮しをしたら善からうと、俄に雪隠めが花を活けたり、香を焚いたり、眞鍮の輪燈に鶴龜の臘燭立、金の御佛器に金欄の打敷高ぶつて見せた所が、根が雪隠のことぢやによつて、逆も其所へ佛像掛るものもなければ、頭を屈めて敬ふものも

ありませぬが、さらばというてそのやうに、錦金欄の打敷しき並べてある所へ、いかにはずんだ時ぢやといつても、用事の達しられるものでもない。さうするこそれが直に雲隠と佛壇の片羽者で、どちらの徳をも失うた誠の世界の邪魔ものゆる、叩き潰してしまふより外はない。人が丁度そのやうなもので、恐れながら上は天子將軍様から、下萬民に至るまで、皆それくの天の命令なれば、誰でも只その身その身の生れ合ひを大切な天命ぢやと心得て、どんなつらいこもあらうと、滅多に藻掻き苦しまず、只其の處を大事くと守つて居るがいつちよい。さうさへして居れば、又よい天命があつて、時節が來ると蓍菴か鰻になつてもあれは、茄子のからが泥鰌になることもあり、子々が蚊になつたり、芋蟲が蝶になるやうな天命もあるものぢや。それがやつぱり順にしてその正を受くといふものぢや。それにその天命を知らぬ凡夫は、何でも此

の世界は、我が思ふままになるやうに思ふから、我が受前の家業や職分は碌々に勤めずして、滅多無性に立身しやうの、出世しやうの、金を儲けう、樂にならうの、藻掻き苦しむが、道を知つた聖賢の御眼から御覽じたら、嗚々氣の毒なものに思召すであらう。

それを一つ外のものに譬へていうて見るに、アノ龜井戸の天神様の邊には、放龜とやらいうて、龜の胴中を絲で括つて、木の枝や屋根裏へ幾らも釣り下けて賣りますが、アノ下けられて居る龜の中にも色々の龜があつて、我が體は天命の絲に括られて居るから、逆も遁けられはせぬといふことを、よく得心した龜は、古い狂歌にある通り、

手も出さず頭も出さず尾も出さず

身を收めたる龜は萬年

と心得て、首も手足も皆胴の中へチツと引つ込めて、唯買つて池の中へ放

してやつた時には、それは達者で水の中を自由自在に泳ぎまはるが、中に天命といふ絲のあることを知らぬ龜は、我が自力で逃れば逃けらるる事のやうに思ふから、我が體は虚空に釣られてありながら、首や手足を長く伸ばして、あちらを向いてはガヤ／＼がやつき廻る龜を、人が見ては、アア愚かなことぢやと思ふけれど、アノ龜の心には嘸さう思うであらう。おれはさうでもモウ二三里も歩いて來たやうに思ふから、ハヤ水のある所へ出さうなものぢやに、エライ道の遠いことぢや。何でも急いで歩かにならぬと思ふであらう。それで何時までも、あのやうに虚空を相手に一つ所をがやついて、後には首も手足も疲れ果て、放し人の來るも待たず、寂滅してしまふもある。

丁度人があの通りなもので、なんほ藻掻いてもがやついても、逆も天の助がなけりやさうしても行かぬ世界を、どうやら藻掻きさへすりや、自

●險しきを行
●うて云々
●易の語であ
●富の札に用
●富興行に富
●興行は無盡
●講の一種、盡
●前に註せ
●膜を張るの
●蜘蛛の糸の
●ことをいと

●易きに居て
●云々
●易の語であ
●る

でも行けることのやうに小人は思ふから、「險しきを行つて幸を求む。」と、登られもせぬ崖道を、無理無體に登らうとしたり、標にもならぬこぼれざいはひを標にして、ひよつとすれば富も出来ることのあるものぢやないや。富の札を買つたり、ひよつとすれば相場も勝てることのあるものぢやというては、米市へかかつたり、ひよつとすれば謀欺も當ることがあるものぢやというては、いろ／＼な欺事をたくんだり、ひよつとすれば善いことのあるの、ひよつとすれば甘く行くものと、標にもならぬひよつとを當にして、急ぎ／＼廻り道するものが多い。それが皆巖壁の下に立つまいふもので、生きた天命といふことを知らぬ小人の悲しさぢや。そして又若い衆などは、アノ蜘蛛といふ蟲が膜を張るのでも考へて見なされ。あちらの木の枝からこちらの木の枝へは、間二間ばかりもあらうと思ふやうな所へ、大層な膜を張つて居ります。アノ蜘蛛に羽もなければ

飛んでも行くまいが、最初はめの絲のかけ渡しは、どうして仕居つたものであらうぞ。既にある時、他の蜘蛛の膜を張るのをヂツト下から眼を付けて居れば、誠に感心な事するもので御座りますぢや。

アノ蜘蛛が始め膜を張らうと思ふ時は、先づどつと高い所から、我が持前の絲を十分長う延ばして、カノ下り蜘蛛といふものになつて、ぶらりつと下つて居るばかりで、自身からどちらの木の枝へ飛ばうとも、絲を懸けうとも爲はせぬぢや。それが彼の「君子は居易而以俟命。」といふもので、只絲を延ばすだけの我が受前の道を十分に勤めて居るばかりで、それから後の成る成らぬは、只天命の風に任せきつて居るぢや。さうすると何れどちらからぞ、天命の風が吹いて来るゆゑ、その時その風に隨つて、向ふの木の枝へチヨイト取付き、それからその絲を傳うて、あちらへ渡しこちらへ引張りしてあのやうな、大層な膜を張りて、懸つたものを取つて

暖簾貫ふ我
商家の軒
しを染出
下に掛く
帷の約、う
のし約、し
暖簾を貫つ
なる。分店
宿這入り、
住家を求め
けること

濱納屋
小物の置
と。屋のこ
御繪馬賣
神佛に奉納
する馬の繪
額を書ける
を奉る代馬
に奉る代馬
に奉る代馬
に奉る代馬

食らうて居りますが、何ぞ奇妙なものぢやないか。

人も丁度あの通りに、只我が道を大事く十分に勤めぬいて、その餘のこゝは何事も天命の風に任せきつて置けばよいに、小人はさうせぬものぢや。

これを町方の手代子などのことといふと、初め奉公に来た時の心持を何時までも忘れず、只主人大事、奉公大事の一心不亂で、商買の道をも覚え、わが受前の勤むべき道を勤むる分の糸を伸ばすことを、十分に居れば、何れ後には天命の風が吹いて来て、暖簾もらうて宿這入りは出来るに違ひのないことを、その勤めの糸を伸ばすことには骨を惜んで、碌々に勤めず、まだ商買の道をも覚えぬものが、はや家を持たうの、女房を持たうの、藻掻き廻る。それがカノ下り蜘蛛が糸を伸ばすこゝは、少しばかり伸ばして置いて、只向ふの木の枝へ飛付かうくと藻掻くやうなもので、程よう飛

付いた所が、後の糸を引切つて向ふへ飛付いたのぢやから、又元の下り蜘蛛から仕直さじや、どうしても膜を張るこゝは出来ぬ。何ぞ若い衆それで詰らぬものぢやないか。

昔の若いものは、始め奉公して先づ家業の道を覚え、それから後に別家して家を持ち、それから後に女房を持ち、それから後に子を持つてその家を相續さす。それがやつぱり順にしてその正を受くといふもので、次第次第に膜を張つて行き居つたものと見えるが、今時の若いものは、どうしても氣が短かくなつたさういふものやら、家業も覚えぬ前に家を持たうしたり、家もない前に女房持たうと藻掻いたり、まだく間違つたのは、女房もない前に子が出来て難儀するもあるけな。

いつち後に出来てよい子が、いつち前へ出来るゆゑ、せうことなしに相手の女を女房にした所、辻に立つても居られぬから、據なく濱納屋の端

か裏借家の隅を借りて家持つても、渡世の道は何にも知らぬゆるゑ、その時俄に狼狽へ出して、是はマアどうしたものであらうと女房に相談して見ても、女房も同じやうな藝なし猿で、何れ人の物を只取る考へより外に思ひ付かぬゆるゑ、せうことなしに、アア紙屑買か、初春さもは頬被りどもして、御繪馬くども賣り歩くより外仕様がなない。それがカノ下り蜘蛛の時、糸を切つて飛んだものぢやから、生涯難儀せにやならぬ。

しかしこりやその町方の若いものの事ばかりぢやないぞ。一理萬通といつて、士でも農夫でも、醫者でも出家でも、道理は皆一つ道理、

さるによつて、人は只我が本心知つて、生きた天命といふことを知り、その天命の道に背かぬやう、今日を大事く、恐れ慎まねばならぬことぢや。さうないさ、さうしても、此の世は只わが思ふままの自力で行ける事のやうに思ふから、前にもいふ通り、我が受前の職分は餘所にして、博奕

小宿遺入り
小宿は一寸
したる宿屋
のことも又
大阪中國邊
では遊女屋
のことはい
後段の意は
分限りに身代
事と破産
宿預りに江
戸の代に江
戸の代に江
曲あるに私
宿に預けて旅
逃走を防ぎ
たること

を打つたり相場をしたり、人を欺してはおのれが身に利を附けること考へたり、人のことを悪ういひまはりては、おのれが立身の足あけにしやうとしたり、

又若いものなどでは、悪い友達につき合ひては、悪い遊びの真似をしたり、主親の眼を忍んでは小宿這入り、遊女狂ひ、すつきり皆あふないことの天上で、巖壁の下に立つのぢやゆるゑ、何れ仕舞には、身を投げるか、首を縊るか、心中するか、よしそれまでは行かずとも、駈落するか、分散するか、勘當に逢ふか、宿預けになるか、鼻を落されるか、目を潰ふされるか、何れいろくさまぐの廻り道をせにやならぬが、その段になつて、「アア何とせう。是も天命ぢや、ヤレく天命といふものはなさけないものぢや。」などと、我からなした造地獄とは夢にも知らず、天道様を怨みたり、人の身の上を羨んだり、

鼻を落す
梅毒に落ち
がかけ落ち
造地獄此
の語は屢々
出所不明な
出居るが
地獄を造ら
うとてあら
後生願ひの
今生惡業未
信極樂にて
來ることを
願つて居な
がら却つて
がら根性が
ふいの根性
をい

足がせ
背留罪人
拘留するた
めは足に
はめると
はことか
せは鏡の
とせは鏡
てが代刑
川名代刑
の合せて
環にた罪
ねの手を
期の間の
のまゝに
て置くも
手鏡も

又遠い田舎などでは、後生願ひの今生惡るといふものがあつて、此の世は僅の境界なれば、さうしても濟むこのやうに心得、親には不孝をし、主人には不忠をし、夫婦喧嘩、兄弟いさかひ、密夫するやら、人をたぶらかすやら、喧嘩をするやら、博奕を打つやら、又いろく工夫をたくんでは、御上へ御苦勞供へるやうなことしたり、人の訟訴事を聞いては、その尻押しをしたりして、揚句の果には、縛られたり叩かれたり、肆されたり首切られたり、

それを爰には「桎梏にして死する者。」というてあるが、「桎。」は足がせの事、「梏。」とは手かせの事ぢやが、そのやうな足かせや手かせの苦しみを受けて死ぬのは、正眞の天命といふものではないから、「正命にあらず。」というて置かれたが、それをやつぱり我が自力で拵へた事とは思はず、そのやうな手かせ足かせの苦しみを身に引受けた時に、何と思ふぞといふと、

「ヤレ、おれは此のやうになる積りではなかつたに、口惜しいことをした。アア何とせう。是も過去生の因縁事ぢや。」の「あれも前生の御約束ぢや。」のというて居るが、何のそのやうな思々しい御約束して生れるものが、何處の世界にあるものか。

入るまじと飾りし手がね我ながら

我が手に入れて苦しみぞする

御上からは、「さうぞ此の手金入れられるやうな事してくれなよ。此の早繩で縛られるやうな事してくれなよ。その爲に爰へ此のやうに出して飾つて見せて置くぞよ。頼むぞよく。」と仰せらるる御心で、御役所の玄關や、警固のもの出張つた所には、何時でもアノ手金や早繩や鐵尺がちやんと懸けて見せてあるのぢやに、それにこちらから出て行つて、「ハイさやうでは御座りませうが、どうぞ此の手へ少しの間、御入れなすつて下さりませ。

捕鯨の持、短杖の柄、所の紅、付ける、早繩の歌、斯かる、斯かる、地獄の釜、地獄の釜、仕舞ふ

私わたくしは此こゝの手てが離はなれて居ゐりますご、兎角とくかく盗ぬすみがしたうなつたり、博奕ばくちが打うちたうなりますから、御忙おせわしい中なかへ御邪魔おじやまでは御座ごぞうりませうが、少せうしの間あひだでもよろしう御座ごぞうります、御入おゐれなされて下くださりませ。又また「御縛おしほりなされて下くださつても随分ずいぶんよろしう御座ごぞうります。」と、我が手てを我われと後手うしろてにしたり、又また前まへで手てをやり違ちがへたりして出でるものぢやから、せうことなしに「ソソナラマア望のぞみの通とほりにしてやらう。」と、手金てがねを御入おゐれなされたり、又また早繩はやなはで御縛おしほりなさるものぢや。

早繩はやなはのかかる恵めぐみみのあめが下した

うたれぬやうに實體じつたいにせよ

ものものの實體じつたいにさへして居ゐれば、此この世よも後のちの世よも、何なにも怖こいことも恐おそろしいこゝもありはせぬものぢやに、兎角とくかくその實體じつたいなことは嫌いやがつて、何なに此こゝの位くらゐの世よ間は世間並せけんならのものぢやからよいの、此この位くらゐの嘘うそは人ひともつくこゝぢや

貝かい撥へつをかき取とる、器きを、長ながく作つくり付つけた

からかまはぬの、此この位くらゐの驕おごりはよいの、此この位くらゐの我わが儘ままは氣遣きづかひないのと思おもひ、此この世よから未來あいて永とこ々の地獄ぢごくの釜かまこけになる御約束おやくそくし居ゐるには、困こまつたものぢや。

それでそのやうな後生願ごせいのねひを、佛ぶつ法ぼうでは蛤はまぐり同行どうぎやうといひますけな。なぜさういふなれば、アノ磯いそに居ゐる蛤はまぐりいふものは、元來もとより海うみの底そこへ生なれたもの、海うみの底そこがアレあれが天命てんめいの居ゐ所ところなれば、いつまでも、その海うみの底そこの泥どろの中なかに深ふかく身みを潜ひそんで、慎つつしんで居ゐりさへすれば、あのやうに磯人いそびとに見附みづけられたり、取とられる氣遣きづかひもあるまいに、満潮みしたうの氣味きみの善よさに、ツイうかくと干潟ひがたへ上あり、淺瀬あしなの砂すなの中なかの危あやしい巖壁いんぺつの下したに、ウクリ／＼し居ゐるから、ツイ磯人いそびとに見附みづけられ、貝撥かいへつへ引ひきかけられて取とられて仕舞しまふ。

さうすると、その蛤はまぐりは、何れ何處いづれどこぞ釜かまの中なかか鍋なべの中なかへ入いれられて煮にられるは知しれたことぢやが、さう見るみるこその蛤はまぐりは、始はじめ干潟ひがたで磯人いそびとに見附みづけら

れ、貝撥へ掛つた時が、モウ何處ぞの地獄の釜へ入れられて煮られうといふ御約束と極めたのに違ひはないから、アノ蛤の取られるのを人間の眼から見て居るこ、ヤレ不使や、彼の蛤は貝撥へ引きかけられた。ソレ又その蛤もかかつたと、誠に取られる度々に手をすけるやうに思ふけれど、蛤はそのかかるこを何とも思はず、只うかくこかかつては、籠の中へ入れられ、貝賣の手へ渡されると、市中を「蛤よく。」というて賣りあるく。その賣聲を人間の耳へ聞くと、「ヨウイ蛤ぢやく。」此の蛤をどこぞの釜へ入れて煮やしやらぬか。どこぞそこらに此の蛤を煮る地獄の釜は御座らぬか。」というて觸れまはるのぢやくに、蛤はやつぱりウカくで、おれを珍らしう籠へ乗せて、何處へやら連れて行き居る。何でもこれは面白いことぢやく。そして又市中は砂の中とはえらい違ひで、途方もない賑かなものぢやく。どうでも是は茶屋へども遊びに連れて行き居るさうななどと思ふ氣位で、

只チウくと潮を吹き居る中、そこらの大きな茶屋の見世へ卸されるこ、茶屋の料理人が見て、

「オヤ是は珍しい見事な蛤、直段は幾らぞといふ。」と、「ハイ幾らで上げませう。」「オオそんならそれでよし。」と、相談の極つた所か、「モウその蛤は、いよく此方の中の地獄の釜で煮ませう。」「しからばさやうなさりませ。」と、相談の極つたのぢやく、やつぱり蛤はそれとも思はず、桶の中へ入れられて水を入れられるこ、「ハア是は又水のある所へ出て来たぞ。うまい。」と喜び居る中、料理人が洗ひ上げて、鍋の中へ入れ、「此の蛤は蒸蛤にするがよからう。」と、水を少し入れて上から鹽をバラくふりかけるこ、蛤はよい氣になつて、

「ヤ是は又潮が落ちて来るさうな。モウく、此方の世界になつて、ヤレヤレ嬉しや心地よや。」と思ふ時は、モウ鍋の下に薪がくべて、火がボロく

後の祭りの神社の終つた又、次の日又、事の済みたる後のこと

燃え居る中ゆゑ、たつた今クラ／＼と煮え上るは知れたことぢやに、それに蛤はマタ／＼ウカ／＼で、「こりやどうやら下の方から暖かになつて來るが、春にきもなつたさうな。チト花見にきも出かけようか。デユウ／＼といひ居る中、ツイくら／＼と煮え上る。

その時になつて、蛤が俄に大きな口をあけて、「ヤレ／＼熱や。ヤレ苦しや。今此のやうな目に逢ふことと、もちつと前に氣がついたら、どうぞ逃ける仕様もあつたらうに、なさけないこゝをした。」と、どのやうに歎いても悔んでも、諺にいふ「後の祭り」、どのやうにも仕様がなない。

先年ある所に、密夫した女があつて、實の夫を密夫といひ合せ、己に殺さうぞとまでした事が露網に及び、終に御上へ召捕られ、御吟味の上、兩人とも死罪に行はれましたが、その死罪に行はるる時、兩人ながら馬へ乗せて、その所の市を引廻はし、成敗場へつれて行つて、兩人とも馬から卸

し、己に成敗になるさいふ前に、少しの間休息させます處、その時カノ女が密夫へ向つていひますは、私は元からあの様なことする氣ではなかつたが、お前が此方の人の留守へ來ては、いろ／＼なことをいひかけさしやるから、ツイわたしもその氣になつて、今日此のやうな目に逢ひますわいと申して、えらう密夫へ怨みをいうたけなが、何とつまらぬものぢやないか。その始にいろ／＼なこといひかけた時が、カノ蛤の貝搔へ引懸けられる所で、地獄の釜の御約束の極まる所ぢやから、ヤレ恐ろしやと逆ければよいに、その時にはおのれも喜んで懸つて置いて、釜の中で煮え上る段になつて、その様な悔みこと幾らいひ並べたきて、そりやモウ地獄の釜の中から、念佛いひ居るので間に合はぬ。

それに又今の女が馬へ乗せられて牽かるる時、手には蛛數を持たせて貰ひ、口には「南無阿彌陀佛／＼。」といひて、牽きまはしに逢つたけなか、

七六八
何と氣の毒なものぢやないか。後生願ふさいうても、無茶苦茶に後生願ふものは、皆此のやうなものぢや、正眞の御性根は疾うから腐つて、モウ地獄の鍋へはまつて仕舞うたから、その跡の脱殻を御上の御慈悲で牽きまはさせ、諸人へ御見せなさるのぢやに、それとも知らず、まだ佛に成るつもりぢややら、釜の中から御念佛とは何と憐れなものぢやないか。御上は誠の大慈大悲ぢや。

それに何ぞや、本性をも取失はず、人間の道を正直に勤めて居る誠の人の首を、何事に御斬りなさるものか。ようまあ考へて見たがよい。それでそのやうに後の世を頼みにするばつかりで、此の世の道を疎かにしたり、來年をあてにして、今年を怠つたりするものを、皆佛法では蛤同行といひますけなが、どうぞお互に此の蛤同行にならぬやう、慎まねばならぬことで御座ります。

方・便・の・語・に
佛・教・の・人・を・導
く・假・の・手・段
の・こ・と

惣じて佛法に三世をいふことを説いてあるのは、眞の愚痴無知の者を嚇してなりと、賺してなりと、誠の道に依らさんための釋尊の方便といふものぢやが、此の方便といふものは、全でない理を拵へていうたやうな虚言ではない。その理は随分あるなれど、さればというて、そのことはしつかりとあるのではないのぢや。
しかしかういうと、御前方が「それは可笑いことをいはつしやる。ないことではないが、あることでもない」と、そりや又どうしたかごぞ。」といはつしやらうが、其所に譯のあることで、此の方便といふことは、元、理を以て事に顯はすというて、その理は素より無い理ではない。随分その理はある理なればそれを假りに事に顯はして説いたもので、近くいへば、小さい二才三才位の小兒が、座敷の縁ばなへズツと覗いて、逆さまになつて物でも取らうと仕居る時、親が見て何といふぞいふと、此の江戸あたりの御

ガに供でつひたつてにだ正とか興'説てのイのものとガモ●
 モン'を後つひたつてにだ正とか興'説てのイのものとガモ●
 シ'く世'へい食'人'が'元'い'ふ'起'の'良'あ'る'色'つ'ゴ●
 ヅ'く'ま'そ'が'ふ'食'人'が'元'い'ふ'起'の'良'あ'る'色'つ'ゴ●
 イ'と'す'子'こ'あ'言'取'居'寺'う'が'た'と'元'が'々'い'ゼ'ジ'此'方'一'イ●

人で見ると、「オオそれモモンヂイが出るぞ。」といはしやるが、上方では、
 「ガングゼイが来る。」の、又田舎では「ガガモウガカブル」のといひます
 が、丁度方便いふものがその様なものぢや。

素よりモモンヂイの、ガモンゼイのといふものがあらう譯はないことな
 れど、小さい子供は、逆も危いことぢやの落ちると怪我をするぢやのと、
 その譯をいうて聞かしても、それを聞分けることがならず、その上、さう
 のかうの言ひ居る間には、大怪我をしやうも知れぬからせうことなしに
 いふ虚言で、そのことはさつぱりないことなれど、その理は丸でないので
 はないぢや。なぜといふに、それをその子が聞入れずして、やつぱり縁ば
 なへ覗き、すでんごろり庭石の上へでも落ちて、天窓も砕いて御覽じ、
 モモンヂイやガングゼイや、ガガモウが出たのぢや、又その外今日いひ
 居ることにでも、理を事にあらはしていふことは幾らもあるものぢや。

で相そか、目指右きの方のつせのれとわ興でとにぞに
 あにろせ蓋をの込の親は。たる鬼、讀ん寺あいつはかま
 るすして目に両人み方指、此のぞに元むどは、。たす
 るい、をあ方さへを左のてと食興、う、。たす
 の形お開てのし左つ口右仕あいは寺そじぐ元のぞ

己にある所の小さい子供が、朝起きて親父へいふには、「ごとさんどうぞ
 御前の足をチイミ出して見せて下され。」といふから、親父はあぢなこ
 をいふと思ひながら、「オイ。」というて兩足を向ふへズツト伸ばして見せた
 らば、その子が見て、グラ〜笑ひ〜いふには、「エエこんなことさんぞ。
 人には平常嘘をいふなの、人を誂すなのというて置いて、御前は又さんだ
 嘘をいひなさる。」といふから、「それは又なぜそのやうにいふぞ。」と問へば、
 その子がいふには、
 「イヤわたしは昨夜宵から寝て、寢所の中で聞いて居つたが、御前は外か
 ら遅く御歸りで、かかさんへいはしやるには、「ヤレヤレ今日は草臥れた草
 臥れた。朝の出がけを先づ目黒までズツと参つて、それから九品佛、祐天
 寺、あとへ歸つて池上の本門寺、それから直に川崎へ出て、大師河原まは
 つて歸つたから、誠に足が摺子木になつた。」といはしやつたから、わたし

あぢげなことをなす
 意。ことなどの
 目黒。東京に
 府。荏原郡に
 あり。不動堂
 寺。比翼。名高
 い。あつて名高
 祐天寺。名は祐
 祐天寺。名は祐
 天。之。助。名は祐
 三。城。國。の。出。人。
 江。戸。に。出。人。
 人。の。檀。子。と。上。
 なる。檀。子。と。上。
 なり。檀。子。と。上。
 ず。檀。子。と。上。

年。荏原郡。目
 黒。村。に。寂
 す。三。才。年。八。十
 本。門。寺。三。頭
 の。蓮。宗。三。頭
 日。蓮。宗。三。頭
 郡。池。上。村。に
 あり。池。上。村。に
 山。と。號。す。長。榮
 弘。安。四。年。池。上
 上。宗。仲。年。池。上
 建。の。開。山。上。創
 人。の。開。山。上。創
 川。崎。近。品。川
 の。附。近。品。川
 リ。師。と。川。崎。の
 大。師。と。川。崎。の
 て。名。高。い。ら
 九。品。佛。と
 東。品。佛。と
 阿。彌。陀。詣。と

はその摺子木になつた足を、チイと見せて貰らはうと思つて今見れば、棒
 にも摺子木にもなつては居らぬ。』さういふたけなが、成程草臥れた時に足が
 棒になつたの、摺子木になつたのさういふたり、辛い物食うた時に、眼玉が
 飛出たというたり、苦勞なこころした時、骨が打れたというたり、皆事が實
 にあることではないけれど、その理を事に表はしていふのぢや。
 そこで、佛法の方便といふことが、丁度マアその様なもので、彼の三世と
 いふこともない理ではない。現在爰に生れて居るものぢやから、生れぬ先
 さいふこともあり、又死亡つた後さいふこころもありして、その理は随分あ
 る理ぢやけれど、事がアノ佛經などにいうてあつたり、又繪に書いて見せ
 てあるやうにあるのではないのぢや。
 惣じてその又佛法に三世因果さいふことを説いて教へる。その畢竟は此
 の世界の小人凡夫は、アノ前にいふ活きた天命といふこと知らぬゆゑ、何

ぞ不仕合せなことに逢ふか、難儀なことに會ふといふこ、モウそれに心
 を奪はれて、小人窮すれば斯に濫すと、孔子の仰せられたやうに、是では
 たまらぬ、是では濟まぬ。漢搔き苦しんで、その苦しみの餘りには、いろ
 くさまざまの悪いことを仕出すものゆゑ、それでそのものどもの爲に、
 過去の因縁さいふものを説いて、此の世でかういふやうな難儀をするのは、
 前の世でかういふこころをしたその報いが來たのぢやの、又此の世であのや
 うに結構に生れて來て、アアいふ暮しを仕て居るのは、前の世でかやうか
 やうの善いことをして置いたその報いぢやのと、一々その幸不幸に付い
 て、過去の因縁さいふものを作りまうけて、その人々へ言ひ聞かせ、他の
 幸を羨まます、我身の不幸を滅多に歎かさぬやうにして、カノ是はかな
 はぬ、是はたまらぬの、胸のもやくの火を打消し、側の物へも燃え付か
 さぬやうの大慈大悲の御方便、何ぞ御親切なことぢやないか。

む。窓。師。の。號。を。賜。は。る。四。王。公。は。り。ま。で。讚。仰。せ。る。な。る。も。の。は。眞。和。二。年。寂。す。の。年。七。十。六。才。の。君。よ。聞。け。の。歌。と。説。き。し。佛。の。説。き。し。け。に。て。は。な。し。か。た。夢。窓。の。國。師。の。傳。記。を。見。な。い。か。分。ら。な。い。は。か。

●失。立。古。軍。陣。に。て。入。る。て。携。へ。た。る。硯。今。旅。行。な。ど。に。筆。墨。を。仕。込。み。て。携。ぶ。る。も。の。印。籠。又。は。五。三。互。に。廻。り。あ。ふ。り。し。に。結。ぶ。腰。に。て。下。ぎ。り。小。さ。な。匣。な。り。千。見。世。と。書。星。見。世。と。書。い。路。傍。に。し。席。を。敷。き。

て、未世未代の笑ひ物になるのであつたらう。」と仰せられたといふことぢやが、何とありがたい御示しでないか。

さすれば人さしいふものは、高うても低うても、ぐどいことぢやが、此の天命さしいふものは、實に慎まねばならぬことで御座ります。それについて茲に一つ怖い話がある。

是は近頃あつたことぢやけなが、大阪の順慶町に、小間物屋の忠兵衛といつて、古道具の小間物商買するものが居たけなが、元は大阪の町はづれ安治川邊に住んで居て、夫婦暮しをし居つたもので、誠にかすかな世渡りを仕居つたものなれど、夫婦とも随分實體なもので、夫は日々荷籠をかついで、大阪の市中を、古金や紙屑を買ひあるき、女房は内に居て、足袋の底を齧したり、洗濯物の受合ひ仕事したりさしいふやうなことで、その日の日を送り居つた所、女房妊娠になつて、一人の男子を生みましたを。

夫婦は喜んで名を初之助と付け、その子を勢に夫婦とも、晝夜油断なく稼ぐ所、忠兵衛が日々市に出て、カノ古金を買ひあるくに、何時となく籠の上へ、古い庖丁やら古い鋏やら、煙管やら金槌やら、何といふことはない、そのやうな古い小道具がたまりますから、それを賣つては又外のものを買ひ、又賣つては買ひ仕居らうちに、自づこ代物が殖ゑて来るによつて、後には古金や反古のやうなものは買ひもします、只鍔ぢやの小刀ぢやの、矢立ちやの印籠ぢやのさしいふやうな小間物をあきなふやうになりましたものぢやけなが、それから後に順慶町の裏店を借りて、その所へ轉宅し、晝の中はあちらこちらに駈けあわいて、右の小道具を商ひ。夜は又毎夜く名高い順慶町の夜市へ出て、餘所の家の軒下を借り、アノ千見世といふものを出し居りましたけなが、此の千見世といふものが、その頃の千見世は甚だわるい商ひを仕居つたものぢやけな。

て、物を賣
る店。てん
とらぼし。
露店。
巾着切。
ナリ前の
と、前に詳
しく註す。
店替子。
店へみせを
取替へて、
客や人々を
だますこと
をす。詐偽
師のこと。

二朱の昔の
錢の額。こ
と、一朱は
六百廿五文
である。
昔一分の額
の二十五錢
のこと。

そりやさうなれば、その邊のカノ名高い大阪の新町の近所ぢやによつて、夜るくは別して賑かで、人の出も大層あることゆゑ、それにつれてカノ巾着切ぢやの、店替子ぢやのさいふやうな悪黨ものが多く出かけて、あちらの見世で盗んだものをば、こちらの干見世へ持つて來ては賣り、茲で人の懐中抜いては、その干見世へ持つて行つては賣るといふやうにするものを、内證で買落し、それを賣つて金儲け仕居つたものぢやけな。その上アノ巾着切なさいといふものは取つた代物を暫らくも我が身に持つては居らぬもので、直にその干見世などに賣つて仕舞ふものぢやけな。それりやなぜなれば自然そこで囚へられた時、おのれが身のいひぬけがならぬによつて、取るや否や直に右のやうな干見世へ持つて行つて、賣つて逃げるものぢやけなが、素より人の物を只取つたものぢやから、價幾らといふ譯もなく、ちつとも早く賣り放して逃げねばならぬといふ弱味のあ

る代物のゆゑ、それを見込んで、百のものは二十か三十、一兩のものは二朱か一步といふやうに安く買ひ落して、それを又人へ賣る時には、相應の直段に賣るものゆゑ、殊の外よい金儲けを仕居つたものぢやけなが、是等は本統に金を儲けるといふものではない。やつぱり盗人の問屋をするといふもので、手ざしてその働さす。盜賊よりも、却つて罪は重い方ぢや。それに何と道を知らぬ人といふものは、情けないものぢや。現在此の忠兵衛も、始め右のやうな古金買ひの籠あきなひから、それ程までにも身を持上げる位の者なら、まんざら悪い人でもないのぢやけれご、人の人たる誠の道を知らぬ悲しさ、金儲けのよきに心を奪はれて、ツイそのやうな不正な商ひをするやうになりましたのぢや。さう見る人といふものは、本心を知つて誠の道さいふものを知つて居らねばならぬものぢや。扱その後忠兵衛は、その通りして夫婦に子一人暮し居るうち、何時とな

女房が煩ひ付いて、遂に空しくなりましたゆゑ、忠兵衛も據なく後妻を迎へました所、その時、子の初之助は、やうくまだ五つか六つ位であつたさうなが、後妻が甚だ心持の善くないもので、亭主は日々商賣のことについて外をかけたまはるに、巳は内に坐つて居て、何一つ仕やう事にもせず、只朝夕の食物拵へて食つたり食はしたりするが勢一杯で、その合間には寝たり起きたり、のらくくして居るくせに、右の七ツになる初之助への當りも甚だよくないから、隣近所のものも、アレハ氣の毒なものぢやと思ひ居る内、又その女房が妊娠になつて、一人の男子を生みましたを、その子をば豊次郎と名を付け、誠に荒い風にも當てぬやうにして可愛いがる癖に、右の繼子の初之助をば、なさけなく責め使ふぢや。

その時が初之助はまだやうく七才か八才位の時であつたけなに、可愛いや冬の寒さの時でも、我が子の豊次郎が襦袢の洗ひ濯ぎまで、その初之助にさせましたけな。

助にさせましたけな。

又近所あたりの走り使ひはいふに及ばず、道の一里ばかりあるやうな所へでも皆その初之助を叱りつけて追ひやる所、素より幼兒のこまぢやによつて、途中で何ぞ面白い見とれるやうなこゝでもあると、ツイ歸りの遅くなることもありますが、さうすると何か大きな突り聲して、「おのれはマア何を仕居つたぞ。飯ばかり大層食ひやがつて、何をさせても埒の明かぬ奴ぢや。チト性根を入れ居れ。」ミいうて、歩るき草臥れて戻つて来た子を裸にして外へ追ひ出したり、背中へ大きな灸を据ゑたり、又或時は尻瘤太のちぎれるだけに抓つたり、それはくむごたらしい痛めやうをして、年中體に生疵の絶えぬやうな目に合はすれど、此の初之助は、生得無爲な生れを見えて、終に一言の言葉返しもせず、只シクくくと泣きながら、「かかさんどうぞ堪へて下され。私が悪う御座りました。これからはいつでも早

無爲
何もしない
おとなしい
こと。
白隠和尚
註前に詳し

く歸りますから。」というて、何時でも謝罪つてばかり居りましたけなが、何と不便なこぢやないか。白隠和尚の歌に、

恐ろしき鬼の姿を尋ねれば

邪見の人の胸にこそ住め

此の女房が正眞の鬼といふものぢやが、夫の忠兵衛は、日々外へ出て居るものゆゑ、その事を夢にも知らぬぢや。その上、忠兵衛が内に居て見居る眼の前では、わざと優しい作り聲をして、兄や〜といひ通し、信實可愛がる風をして見せたり、又折々は己が買食の食ひさしでも出してやつて見せるから、忠兵衛は只女房が可愛がる〜とばかり思つて居るが、何と世には恐ろしい人もあるものぢや。

丁度いうて見ると、十月頃の時雨日和を見たやうに、表向をうらやかに見せて置いて、内證でむごうつれなう當たられる程、辛いことはないもの

うらやかに
つらやかに
したきりか
したきりか

ぢやが、是が誠の鬼といふものぢや。

扱その通りに初之助は、毎日〜辛い目に逢はされて居る内、追々二人の子供の手足も伸び、忠兵衛は商賣が繁昌して、後には順慶町の表家を借りて、大きな道具店を出すやうになりましたけな。さうなると母親は、その身上を我が子の豊次郎に遣りたいが一ぱいゆるゑ、ます〜織子の初之助を悪んで、親の忠兵衛へも、我が子の豊次郎がこゝは、鬼に角によくいひなし、織子の初之助がことは、彼が身に覚えのないやうなことまで作り拵へて、悪しくいひ聞かすゆるゑ、後には親の忠兵衛までが豊次郎を可愛がつて、兄の初之助をば「益に立たす。」の、「のら松。」のというて憎むやうになりましたけなが、何と怖いものぢやな。

さうなると豊次郎までが、何時となく鷹のやうになつて、兄の初之助を兄のやうにもせず、犬か猫かをあしらふやうになつたゆゑ、後には初之助

たたみ
たたみ
たたみ
たたみ
ふに同じ

が身のたたずみ場はないやうに成るのみならず、親の忠兵衛は、「己がやうな設備しは、内に居ても厄介者、さちらへなりとも出て行き居れ。」といふやうになり、母親は又それを幸に、さうぞ早く死ねかといはぬばかりの當りをするゆゑ、初之助はさうも内に居られぬやうな様子になつて、據なく内を出て、大阪の島の内といふ處へ行き、阪町といふ所の藝子屋へ這入つて、やうく藝子の三味線持ちあるく、おいしく男ごいふやうなものになつて居りましたけなが、生得物軟かな生れゆゑ、何處へ行つても人に可愛がられ、大勢の藝子やら大鼓持やらが、寄つてかかつて、いろくいな藝を教へてやつて、三四年が間にさんとマア太鼓持といふやうなものになりましたけな。

然る所親の忠兵衛が方は、その後追々商賣が繁昌して居る内、是も三四年目に忠兵衛は死んで仕舞ひ、あとは母親の望みの通り豊次郎がものにな

つた所、怖いものぢや、その近所に塗物師伊三郎といふものが一人居て、是はその忠兵衛が死ぬる二三年前から、商賣がらのことぢやによつて、晝夜懇意に出入を仕居つたものぢやさうで、忠兵衛が死ぬると、その伊三郎さいふものが、晝夜そこへいじり込んで寝起して居る所、後にはとんご後家夫婦になつて、内のことから外のことまで駆引を仕居つたけなが、元來此の伊三郎といふものは、殊の外人柄の悪いもので、大酒を呑み、博奕を打ち、遊女狂ひや茶屋這入りに儲けた金は皆遣うて仕舞ひ、後にはそろそろ親兄弟の物まで持出すやうな、手に合はぬ代物ゆゑ、實の親兄弟にも見放され、やうく裏屋の小さい所を借りて、一人住して居る位のものぢや處が、それが右の小間物屋へはひつたものぢやによつて、己が職の塗物師の仕事は仕やうことにもせず、夜も晝も大酒飲んでのはらりく遊びあるき、その合間には博奕と茶屋這入を仕事のやうにして居る。

その上又博奕に負けて金がないやうになると、彼の小間物屋の内へ歸つて来て、ソレ二歩貸せ三步貸せのと強無心、始の程は、後家も己が愛欲に引かれて、少々づつも出してはやり居つたけなが、後には段々無心が大きくなつて、一兩二兩といふやうになるから、後家もそろ／＼眼が覺めかけ、これでは堪らぬと思ふから、いふままには金も出さず、又店の代物を貸せといつても、貸しもせぬと、それから逆に腹立てて、「おのれはおれを誰と思ふぞ。おれはこれその始め、おのれが爲に此の大切な御命をはめて掛つた伊三郎様ぢや、粗末にするに罰が當るぞ、金がなくば外の代物、帯でも櫛でも笄でも、何でもかでも御嫌ひないのぢや。きり／＼爰へ出し居れ。」などと、どうやら芝居で悪方どもがいひさうな言葉付で威し付けるが、それでも後家が出てやらぬと、それから腕をまくり、後家の髻を取つて握り拳を振上げてさん／＼に引伏せ、目に合はすゆる、せうこみなしに櫛

でも簪でも有合ひのものを出してやると、それを以て博奕を打ち、勝つた時にはその金を酒と遊女にはめて、仕舞には負けて手元がなくなると、戻つて責めるゆる、いかなる後家も愛想つかして、ああ情けないことぢや。どうぞモウ／＼アノ人が此方の内へ來ぬやうにしたいものぢや。つらいことぢや、難儀なことぢやと、幾ら泣いても悔んでも、元來己が腹の中から招き寄せた鬼ぢやもの、除けうさいうても除けやうがないが、何と困つたものぢやないか。これでこれ天命に背いた恐ろしさを考へて御覽じませ。始め此の後家が忠兵衛が方へ後妻に來た時は、前妻の子初之助は、やうやうと六ツか七ツで、母に放れた便りのない子のことなれば、とりわけ不便なものと思つて、可愛がつて育ててやらねばならぬものが、繼母たるもの天命といふものぢやに、その天命の道に背いて、むごうつれなう當つたばかりでなく、内の身上のよくなるに付いては、おのれが子の豊次郎に

人盛なる時
 春秋時代に
 申包胥の
 うたふ人の
 衆き時は
 我が鬼の
 餓鬼のと
 なるべきか
 と思は

後を取らせたく、おのれが爲には大切な義理のある天命の預り子をば、いろくこ悪ういひ、夫の忠兵衛が胸を狂はせて、その内を追出させ、それのみならず、大切な夫の目を忍んでは、カノ塗物師伊三郎を不義放埒、誠に天命をちつとも恐れ憚からず、己が思ふままにして、我が子の豊次郎に後を取らした所、今此の塗物師伊三郎、我が鬼の呵責、何ぞ恐ろしいものぢや御座りませぬか。

「人盛なる時は天に勝つ。天定つて人に勝つ。」無理も巧んでする段には、随分一旦は出来るものぢやが、それを何時までも仕通さうといふことは、どうしても出来ぬことぢや。

それを譬へていふに、今茲にあるこの茶碗でも扇子でも、此のやうな形のあるものを、宙に空へ上げやうといふことは、どうしても出来ぬことで、凡て形のあるものは、下へ下るのが自然の道理なれど、それでも茲に力の

強い人があつて、おれが宙へ上げて見せうといふて、力に任かして投げ上げれば、その人の力だけは上りもします。それがそれ、人盛んなる時は天に勝つといふもので、暫らくは上りもしますが、さらばというて、その上けたるものをいつまでも、上へ上らせうといふことは、そりやどうしても出来ぬことぢや。

さう見ると、一旦上へ上がるやうに見えたのは、そりやその投上げた人の勢力だけのことで、次第々々上がる勢が弱くなつて、その勢が盡きて仕舞ふに、天定つて人に勝つて、元へどんと落ちて戻つて来る。その落ちて戻る段になつては、留めやうといふことも出来ぬが、その上餘計高く上つた方が、下へ落ちる落ちやうもひどい。

今此の忠兵衛が後家の、塗物師伊三郎に責に逢ふのも、今まで無理に天に勝つて上りつめたものが、今又天定つて、ソロソロ落ちて戻りかけるの

ぢやが、何と氣の毒のものぢやな。その時我が子の豊次郎は、やう／＼まだ十七であつて、何の分別もなかつた時のことであつたけなが、後家はその通り、塗物師伊三郎に責めらるるをいやがつて、どうぞして塗物師伊三郎と仲を切りたいものと思つて、いろ／＼と愛想づかしなことをいうても見、仕ても見せるけれご、中々さういふ悪いものゆゑ、切れうというても切れもせず、二日置き三日置き位には、酔つて戻つて寢泊りし、明の日の出には博奕の元手をせぶるゆる、今は後家も困り果て、「どうぞしてアノ人の來ぬやうにしたいものぢやが、どうするがよからうか、かうしたらどうであらうか。」と、我が子の豊次郎を相人にいひはすれごも、さらばといつて、始めよりおのれが不義をしたことが、打明けていはれもせず。

只「アノ人は悪い人ぢや。アノ人があのやうに此方の内へ來てくれば、此方の身上は潰れて仕舞ふ。どうぞアノ人は、早う死んでなりと呉れば

よい。」の、「居らぬやうになつて呉ればよい。」の、夜も晝も言ひ居るゆゑ、豊次郎は子心に、それを誠のことと思ひ、いかにもアノ塗物師伊三郎めを居らぬやうにして仕舞つたら、母者人も安氣になられ、此方の家の爲にもなるご、一筋に思ひ込んだが、その年の六月頃、或日の夕暮に、豊次郎は見世を片付け、戸口に立つて涼み居る中、彼の塗物師伊三郎が、何時もの如く酒に酔つて戻つて來たを見付け置き、そのまま豊次郎は近所をあら／＼と涼みあるき、夜中過ぎて戻つて見れば、行燈の火は消えてあれども、奥の間にいつもの如く蚊屋を釣つて、塗物師伊三郎が正體なく寢て居る様子なれば、今宵こそよき折と思ひすまゝ、見世の賣物に掛けてある脇差の、いつちよく切れさうなを、探り／＼取つて來て、蚊屋の鉤手を切り落し、蚊屋の上から、胸の邊りと思ふ所を、グザと一突きに突き通した所、程よう咽喉笛の通りへ入つて、ギヤツともいはず、そのまま息は絶えて仕

舞つた。

七九二

それから豊次郎は先づ仕済したと思ふから、次の間へ出て、いつも母親の寢て居る蚊屋へ行つて、「かゝさん今戻りました。かかさんへ。」といつても、何の答もないから、をかしいことと思つて、蚊屋の中へ這入つて見れば、そこには居らぬゆゑ、是は合點の行かぬことと、火を燈して元の蚊屋へ行つて見れば、塗物師伊三郎と思ひ込んでさし殺したは、現在の母親であつたけな。何と世にはマア恐ろしいここの出来るものぢやな。

それがどうして、そのやうに間違つたのだといふと、素より二人は同じやうないたづらものの揃ひゆゑ、豊次郎は留守のことなり、誰憚からぬ氣に成つて、後家も一緒に男の蚊屋へ這入つて寢たるうち、男めは又博奕場が戀しうなつたやら、そつと抜けて歸つたのを、後家は知らずに寢居つたのぢやけな。それから豊次郎は、人違へとはいひながら、現在の母親を殺し

たここぢやによつて、誠に仰天し、地團太踏んで歎きましたさうなが、元來此の豊次郎も、年も行かぬにそのやうな、大膽なこと思ひ付く位のものゆゑ、外へ走り出で、「ヤレ盗賊ぢやく。」と、大音上げて呼ばはるゆゑ、隣近所のもの、驚きて、我一と駆付けて来て見れば、その仕合せゆゑ、「是はさうしたこごぞ。」と問へば、豊次郎が申すには、「私は暮頃より納涼に出ました。只今歸つて見ますれば、何者の仕業やら、母人をコノやうにむごたらしう殺して御座る。どうぞ御上へ御願ひなされ、母の敵取つて下され。」と、さめくく泣きますゆゑ、近所のものも尤のここと思ひ、直様御上へその旨を註進しました所、早速檢使の御役人が御座つて、いろいろと御吟味がある處、家の中に何一つ盗まれたものもなければ、盗賊の仕業とも相見えす、さすれば、何れ遺恨ありしもの仕業ならんと、隣近所のものへ、平常の後家の人柄から、常に懇意にするもの等のこごを、委しく御

七九三

聞合せがある所

近所のものは、平日の見聞して居る通りを具に申上ぐるにつき、カノ塗物師伊三郎がここをも申上げ、又その夜の暮頃に塗物師伊三郎が来たことをは豊次郎が申上げたによつて、それは怪しいものと御疑ひが懸つて、直に塗物師伊三郎は召捕られ、種々御吟味が御座る所、塗物師伊三郎は、さらく覺えのない譯を申上ぐれども、平日が平日ぢやによつて、中々御疑心が晴れぬから、まづ牢舎を仰付けられ、折々出して、嚴しく拷問せらるるゆる、塗物師伊三郎はせつない餘りにいひますは、

「私は毛頭殺しました覚えは御座りませぬが、元來アノ小間物屋には、初之助と申して、忠兵衛が前妻の子が一人御座ります所、後妻に來た右の後家が人柄のよくないもので、その初之助を憎み、尙ほ身上を我が子の豊次郎に取らせたさ、右の初之助をばいろくに悪しくいひなして、忠兵衛が

市立の狂つて今河
市立の狂つて今河
市立の狂つて今河
市立の狂つて今河

存生中に家出させまして、今では坂町に流浪して居りますが、元より勘當の身と申すでも御座りませぬば、全體は小間物屋の身上は初之助が取るべきもの、それを後家が居て取らせぬゆる、その遺恨にて初之助が後家を殺したことやらも知れますまいと申すゆる、それもどうか怪しいものと、直に坂町へ初之助を召捕に行かれた所、坂町宿にて申しますは、

「初之助は先月何時日に、讃岐の金比羅の市立へ此の邊の藝子共の稼ぎへ参るのへ、附きまして参りましたゆる、内に居ませぬ。」といふゆる、早速讃岐の方へも御手がまはつて、聞合せになつた所、その言葉に聊も違ひなく、二十日餘りも前から、其所に往て居ることが明かに知れたゆる、それはそのまま御構はなかつたけなが、なんぢ奇妙なものぢやないか。

始めから正直にして、あなた任せになつて居たものぢやから、丁度その様な大變の時には、天道様から、「そちは其所に居てはあぶないから、ちい

「あちらへ寄つて居れ。」というて、讃岐の市で御やりなされたやうなものぢや。

又その中で塗物師伊三郎は、己が難儀を逃れうとて、罪もない初之助を疑ひ、そのこゝを申上げた所、それが大きな違ひであつたゆゑ、尙々塗物師伊三郎は、御上の御疑ひが深うなつて、度々厳しい拵問に逢つたけなが、是がそれ親兄弟にも常々の不行跡と見限られた、忠兵衛が女房を盗んで、その跡へにじり込み、後家を責めたその報いが、今その身へ戻つて來たのぢや。

それで此の塗物師伊三郎は、どうしても御上の御疑ひの晴れやうがないゆゑ、長く牢舎になつて居つたが、遂に牢死をしましたけな。

されども右の後家は、いよく誰が殺したまふことも分らず。よもや又實の子の豊次郎が仕業であらうきは、誰あつて思ひ付かぬことなれば、

まづその儘になつて居た所、豊次郎は一人になつたことゆゑ、何をするといふこともなく、内のものを賣食ひにして、ぶらくして居りましたけなが、後には家明けて、何處へやら往て仕舞ひましたけな。

されども爰に明らかなこゝがあるは、その様な大膽な事する奴でも、やつぱり天命の性といふものが具つてあるゆゑ、一旦は近所の人を欺き、御上をもたばかつたけれど、自身の腹の中が濟まぬから、明けても暮れてもその親を殺したことが氣にかかつて、アアいとほしいこゝをした、なさないこゝをしたと思ふ心が、京へ行つても長崎へ行つても、忘るる間がないゆゑ、何を見ても何を聞いても面白いといふこゝがないけな。

それでとんこ活きて居る甲斐はないことになつて、いつそのこと御上へ自身から訴へ出て、御成敗に合つたなら、責めて殺された母者人の思ひ晴れにもならうかと、いふ氣になつて、三年目に大阪に立戻り、自身から御

上へ訴へ出で、御成敗になりましたけなが、その訴へ出た時、御白砂で殺した子細を御聞糺しがあつて、いましめ繩をかけられた時、「ヤレ嬉しや是で安心。」といひましたけなが、何ぞ天は明かなものぢや。

扱此の話しは近頃にあつたことぢやさうなが、此のことの始終で、天命の明かなこと、能く考へて御覽じませ。始め忠兵衛は荷籠をかたいで古金買ひあるき、女房は内に居て足袋の底刺したり、いろくな賃仕事して、その日くを送つて行き居る時は、却つて大きな悪いことをも得せず、正直な商ひして居つたものと見えるが、その内に出來た初之助は、どうしてやら生涯無難に暮し、又忠兵衛が手元が能くなつて、順慶町へ宿替して行き、カノ夜見世を出して、不正な商賣をする内に出來た子が、此の豊次郎ぢやが、丁度それだけ不正なことが出來て來て、據なく重い御成敗に逢はにやならぬことになり、又女房はおのれが氣儘我がままを仕通したばかり

で、我が子の爲に殺されて仕舞うた。

さう見ると實に天命といふものは、恐ろしいものぢやから、それを知らさうばつかりに、孟子が茲に、「命にあらざるいふことなし、順にして。その正しきを受く。是の故に命を知るものは巖牆の下に立たず。その道を盡して死するものは正命なり。桎梏して死するものは正命にあらざるなり。」といつておられました。先づ此の御話しは是ぎり。

心學道の話第七篇

「孟子曰く、萬物皆我に備はる。身に反さうして誠あらば、樂しみ焉れより大なるはなし。強恕して行ふ、仁を求むる焉れより近きはなし。」

この語は殿誰も御存じの孟夫子の御言葉で、世界中にあるとあらゆるものは、「我一人の身にらやんご備りきつてある。」と申すことを「萬物皆我に備はる。」と申します。

此の人間の心と申すものは、「衆理を具へて、萬事に應ず。」と申して、一切の理を具へてあるもの、此の處は修行いたして見た人でなければ知りません。上は天子様から下は穢多乞食に至るまで、人の形を生れて出たご申すは、此上もないありがたいことと思はねばならぬ。

なぜなれば、人は一箇の小天地と申して、丸で天地の雛形、此の身は三

衆理を具へて萬事に應ず
天子の前に註したる

此のうやむと
丑の辰
巳の辰
やの辰
ふの辰
昔の辰
がの辰
種々の辰
の辰
あつた辰
でつる辰

千世界の眞木。此の心から萬物は生れ出たもの、神代の巻の天照皇太神を生み給ふさいふ所に、伊弉諾伊弉冊の二尊か、山や川を生み出し給ふと申すことがありますが、生むごは子を産出というでは御座りません。幾ら神様ぢやこて、海や川を産むごとは出来ぬ筈ぢや。

産むと申す言葉は神代の言葉で、今の世の中で、極り定まるご申すごで、菓物などの熱しきりたるを、能くうんだと申しますも熱し極はまつた事、夜の九ツ時を子の時と申すは、日天子様が東の方へ御出なさらうといふ根ざしゆるゑ、子の時ご申し、それより日天子様が東の下の方へ廻り給ふ處で、爰が日の出ようごする始めゆるゑ、うひくしご申すごで、丑の時さいひ、モウ七ツになると日天子が段々と御上りなさる處故、戸びらけるやうなものゆるゑ、戸びら開くを略して寅さいふもの、それから六つになると、日天子様が生れるといふことで卯といふもの、モウ五つ時になると、

鎌足公藤原の
藤原鎌足
の孫藤原
氏之始
その命は
出づる天
皇を助け
て蘇我氏
を誅した
功臣

日天子様が山から突つ立つといふこゝを辰と申したものの、それから段々に
お上りなされて、みつるさいふ縁で己というたの、とうく日天子様が天
の真中、頭の上に御出なされた所を午といひ、爰が一日の定まる所、則ち
極りの義でうむさいふこゝの轉言で、うまご申したので御座ります。うま
しなさいふ言葉の本で御座ります。

凡て日本の極むかしは、文字といふものはないゆゑ、十二支の鳥や獸の
影を借りて、符牒にして、鎌足公も、我が日の本は、天地を以て書籍とし、
萬物を以て文字とす。」と仰せられました。そこで物の極つたことをうむと
申しますから、山をうむ、川をうむといふは、此の山は奥州、この山から
こちらは出羽、此の川は大和、此の海は紀州などと御定めなされたことを、
山をうみ川をうむというたので御座ります。

天地の開いたといふは、道開きをしたこと、國は開きたれども、一國の

多きは
澤山のこと
と

かくひし
此の語何
に誤魔
がある

主を定められぬから、伊弉諾伊弉册二方の思召で、「いかでか天の下の君た
るものを生まざらんや。」と仰せられて、色々と尋ねて見るに、此の國の主
には、あの日天子こそ究竟のものと思召したれば、天照太神を御生みなさ
れたもの。そこに我が子さはなりといへども、かくひしにうべ此の國に止
め祭るべからずといひ、成程日天子様は、アノやうにぐるく廻り通
しに廻つて御出なされるものゆゑ、止め祭ることは出来ぬ筈ぞ。そこでその
助けになるものを、ま一人定め置きたいものと思召して、月讀尊を御生み
なされたのがお月様、

三番目に御生みなされたのが蛭子尊、此の神は癩疾にて、三年立てども
足なほらずといひ、腰痠ゆる、岩楠船といひ、楠の木船へ乗せて、
風のまに海へ流したりといひ、どちらへなりとも流れよといひ、
海へ風に任せて流しものになされたと申すが、これには傳のあるいひぢや

大内裏の御所なごい
大内禁中
大御所
徳川家齊のこ
かけまくも
口にかけくも
も恐れ多けん
りといふ意ない
一政の一人
張政の一人
の張政の一人

が、餘り長うなりますから申しませぬ。

是等のことは昔のこととのみ思ふが、今の世でもすつぱり禁裏には備りて居ります。是は現在に形を定めて、その通りを下に立てたものゆゑ、今の世でも大内は此の通りで御座ります。

今上皇帝は日天子様で、取りもなほさす天照皇太神様で御座ります。當大御所が御轉任あらせられた時、御歌を天子様へ上らせられる時に、皇太神宮へ奉納の和歌一首ご御座りまして、

かけまくらむすぶの神の結びます

野邊の若草かしこみつまなん

と遊ばされて、その下に「前左大臣征夷大將軍兼徳川武藏守源家齊。」と遊ばされて上られました。

そこで關白は月讀尊で、關白様は一の人と申して、御攝家方の中から

御家來の中
此の誤りな全
り凡て此
の邊皆應立
に説いて立
てた説いて
僻説にして
取るに足ら
關白は月讀
尊と關白
天子と關白
同じだとか
いふのは大
不敬な説で
又、間違ひ
説である御
天子には御
隨身といふ

御一人、御徳の勝れなされた方を選んで御立てなされます。これは御家來の内では御座りません。それゆゑ、隨身を御連れなされますことは、天子様と同じこと、只天子様のは御隨身と御の字を付けて呼ぶ違ひばかり、關白様の御脊は大納言が御取りなされる。夜分御下りの節は、御式臺へ大納言の官を御持ちなされた方が、松明をこもしてちやんとそこに待つて居て御供を致し、御輿に召すまで待つて居る。召すと外のものに渡すが、召さぬ時は御館まで大納言様が御持ちなされますと申します。

天子様御即位の時も、關白様から天子の御位を御貫ひなされ、又御返しなされるも關白様へ御返しなされます。御返しなされて仙洞様に御なりなさるるを讓位と申します。たしかその仙洞様御讓位は三月廿三日で御座りました。今上様御即位は九月の三日やらで御座りましたが、その間天子の位は關白様が御持ちなされて居らしやります。さらばというて關白様の位は

式臺を載せる
白臺へ返す
いふ説は甚
だ不都合な
説である
仙洞様
上皇の御事
を申し奉る
皇の御事上
今上様
申す天皇を
西の宮にあ
攝津國に
り津國にあ
天地相去る
遠からず
天の御柱を
以て天空に
上る

天子様から下さる。これはお互に御我が儘のならぬやうに儀定を立たても
の。

第三番目の蛭子尊といふは、前にいうた通りの船へ乗せて海へ流したの
が、西の宮へ着いて、それが今いふ胡子ぢやさいふは大間違、蛭子尊とい
ふ星のことで、これで天の三光を並べていうたもの、星といふ字は、日
生と書いて、日の子と申すことで、これが今の堂上方のことで御座ります。
それゆゑ神代の巻に、天地相去る遠からず、天の御柱を以て天空に上
る。」とあります。御柱とに人のこと、人あつての天地萬物、人が世界の心
木で御座ります、して見れば、人と生れたありがたさの天上ゆゑ、天の御
柱は申します。たつた一つの此の心木からして、東西南北の四方は出来
る。
人に聞いて御覽じませ。「東西南北はマア何が初めて御座らうか。」といふ

この蛭子の
神の隠り
は、隠り
甚しい誤り
で、ある
西家の東は
東家の西は
絶對の東西
は、絶對の
所を定め、
その東は西
絶對あるが
いふ何本に
あるか不明
なれども、
普通に佛の
て居る説
で、佛の説

と、「知れたこと、東が始めよ。」「そんならその東は何所から出た。」といふ
と、答へることが出来ません。四方とも皆我が體から出るといふことには
心付かぬ。此の體に此の心木をかついで歩くのぢや。「西家の東は東家の
西。」というて、爰の内で西の方と思つて居るは、西家では東の方、易の乾
兌離震巽坎艮坤も此の體が始め、世界の出来るも此の體から始ります。そ
れゆゑ爰に、「萬物皆我に備はる。」というて御座ります。
親といふも子といふも、兄といふも弟といふも、夫婦も友達も、皆我が
體から對して出来た名、我が身といふものがないと、親といふも子といふ
も、兄弟も夫婦もない。そればかりぢやない、一切萬物皆その通り、我が
此の體は取りも直さず、一切萬物の影法師ぢや。蕃椒の味はさうぢやと聞
くと辛いといふ。その辛いといふは誰に習うたのぢやさいふと、イヤ習は
ずにおれが知るのぢやといふ。そんならどうしてそれを知つたといふと、

舜は夫れ大知なるか
 神佛はありがたいものさ
 神佛はありがたいものさいふ。その有りがたいはさうして知つた。人に
 聞いて知つたの。さうして見るとおれがくの利口發明で知るぢやない。
 皆教へて貰うて知つたのぢや。大工が棚を釣るも、棚に習うて釣るのぢや、
 皆向ふに教へて貰うて、向ふの通りにしさへすれば、それでよい。
 そこで聖人や佛様は、少しも私の思慮分別といふものは御出しなさらぬ。
 中庸にも、「舜はそれ大知なるかな。舜問ふことを好んで、邇言を察す。」
 とある。論語にも、「子太廟に入つて事ごごに問ふ。」といひ、孟子の「禹王
 水を治め給ふ。」といふも、水に習うてなされたもの。馬の出来ぬ中に轡を
 拵へて待つて居たではない。馬を見て後に轡を拵へたもの、牛といふもの
 が出来て鼻ぐりを造つたもの、
 凡て人は朝起きるから夜寝るまで、動いたり働いたり、座つたり歩行い

身に反さう
 しで誠あら
 ば子の語な
 り孟子の語な
 三教至極の
 神儒佛の
 三道にて
 何をも我が
 身を知り極
 するを道と
 至極の道と
 するを道と
 達磨大師の
 印度より支
 那に來りた
 高僧の註
 せり詳しく

たりすること、一つでも我がするといふことはない。向ふのものが動かせ
 てくれるのぢや。一切萬物の働きはすつぱり此の身に備つて御座ります。
 かやうに一切萬物の働き我が身に備つてあるゆゑ、我が身といふものは、
 扱もく不思議とも妙とも、廣大微妙なもの、何とも角ともいはれぬ有り
 がたいものさ、身に反さうして誠あらば、神といふも佛といふも、皆我が
 身のこと。我が身を知り究むるが三教至極、
 それを我が身の寶といふことを知らずして、外にどんな結構なものでも
 あるかと尋ねあるいたさて、知れることではない。達磨大師も「世塵を捨
 て、道を求めんと欲するものは、宛も兎角を求むるが如し。」とあつて、此
 の身を捨てて外を尋ねるは、兎の角を尋ねるやうなもの、どうしても見付
 けられはせぬ。此の一身が直に世界、世界と此の身少しも隔てはない。
 恕といふは我が心を以て人の心を押すこと。思ひやりを讀んで、字も心

世塵を捨てて
 道を求め
 んと欲する
 もの宛角を
 もの宛角を
 むるが如
 し。得がた
 き。譬への
 と。譬へに
 角がな
 だ。それを
 が。す。に
 ふ。す。に
 手島先生
 と。堵。庵。の

道歌を平易
 仁義を
 に。悟。ら。せ
 る。た。め。に
 ん。だ。歌。に
 能く近く
 を。取。る。近。く
 論語の仁也篇
 の。語。の。仁。の
 道。の。道。の。字
 は。方。の。道。の。字
 正。し。い。の。字。が

の如しと書いた文字で、我が心を手本にして、我が心に快いと思ふことは人に施し、我が身に悪いと思ふことは人にも遠慮する。人ばかりぢやない。萬物此の道に行き渡るやうにする。是を勉め勉めて今日を行うて行くのは仁の近道。

身をつみて人のいたさは知られたり

命は惜しきものと知らずや

人が己に對して無禮を仕向けるに、自然と腹が立ち、親切にしてくれると嬉しく思ふ。他人に交際ふも、爰を推してすると道に適ひます。何事でも我が身を手本にして人に及ぼす時は間違ひはない。

よろづ我が本の心に味ひて

あんばいよくば人にふるまへ

と手島先生が道歌にも仰せられました。我が子の孝行ならんことを思ふ

なら、先づ自分から親に孝行するがよい。旦那が家來に忠を望むなら、自分の君へ忠を盡すやうにするがよい。論語にも、「能く近く譬を取る。仁の道。」というてあります。所を兎角に小人凡夫は、向ふばかりに目を付けて、わが見反らぬものぢや。

或所に爺嬭と向ひあうて、茶を呑みながら煎豆を食ふ顔をつくづくと見るに、顔中が伸びたり縮んだり、むがくするありさまを眺めて居ました。が、ふつと、「コレばばや、此方おれが所へ嫁入して来た時は幾才であつたの。」ばば、「何言はつしやるかと思へば、知れたこといの、十八の春ぢやわいの。」ぢぢ、「ほんにさうぢやつたけ。それに就いて、嫁入の時盃事がすんで床入の時、互にいうたことを覚えて居らしやるか。」というたれば、ばば、「此の人は何のここのい、置かしやれ。」ぢぢ、「イヤ覚えてか。ばば、「何ぢやらう、御恥かしい。」ぢぢ覚えてなら言うて聞かすぢや。」ばば、「二世も

列女傳、七卷あり、漢劉向の著あり、外に續傳あり、不明な者あり、君君たらざる論語顔淵編にあり、御高札往來繁き辻に書き掲げ、置きて、公衆に示す、札に、札に、札に、

三世もというたことぢやらう。」ちぢ、「ハテサテそなたはそれを覚えてか、南無三ああや。つくづくとそなたの煎豆を食ふ顔を見て、おりや興か覺めはてた。あの時に二世も三世もというたは嘘ぢや程に、さう思つてたもれ二世も三世も所ぢやない。此の世の中ばかりでもないやになつた。」といふ話しがあるが、向ふの年寄つたことは見えるが、自身の年寄つたは心付かずぢぢはやつぱり花婚の氣で、身に立反つて見ると、我が身も同じやうに年は寄つて居る。

それゆる思ひやりさいふことが大事、教の書物を見るにも、孝子傳さいふ書物は、子の見てよいもの、親の見る時は必ず小言の種、列女傳は女房の見るもの、亭主が見ると喧嘩の仲人。孟子の「君の臣を見ること手足の如くなれば、臣の君を見ること腹心の如し。君の臣を見ること土芥の如くなれば、臣の君を見ること寇讐のごとし」と仰せられたは、君への教論

語に、「君、君たらずと雖も、臣以て臣たらずんばあるべからず。」といふたは、世の中の家來への御戒め

御高札を聞くにも、「家來を憐むべきこと。」といふは、家來たるものは、耳を抑へて聞かぬがよい、そのかはり「主人ある輩は、奉公に精を出すべきこと。」といふ時には、主人は耳を塞いで聞かぬやうにするがよい。兎角、身最負身勝手から、道は曲るやうになる。私欲私心を捨てて見ると、三千世界が丸で我が物。盤珪禪師が、

をしやほしやと思はぬゆるに

今は世界が我がものぢや

というた通り、此の五尺の小さな體がある故に、大きな世界が狭くなります。我のさつぱりなくなつた所が聖人、佛。此の體に括られて生涯苦しみに通しに苦しむが小人凡夫、此の我のないに就いて面白い話が御座ります。

盤珪禪師の保
播磨十村の
人千村の
隨得度者
安三師調
禪大悟者
正三悟者
前應三悟者
寓山三友
蕃論之辨
伏せし之
の知萬所
二の萬治
住妙心寺
春江戶六
き播磨年
月播磨年
二歳七
十

窓のつゞ
室直清著
と松崎幾
の著これ
何れなる
か。これ
足輕雜兵
の下の源
頃より源
代には川
しに兵卒
のものが
らもの組
ころと銃
手下の

是は實にあつたこゝで、窓のすさびを申す書物にある話、勿論そのもの
の名は出ては居りませんが、四五十年前のこゝちやが、

肥後の熊本城主細川越中守の御家來のよし、足輕體のもので至つて
輕いもの、殊に貧窮なものなれども、正直正路に生れて、御屋敷の長屋
住んで居りました。中々大工など頼む程のことも出来ず、自分の手細工、
佛壇を隅の方へ拵へて、張付などをして出来上りましたゆゑ、先祖兩親の
位牌などを並べて見て居ると、女房も側から「よう出来ましたが、これで
は肝心の御本尊様がな。何卒紙表具でも木像でもよいから、御据ゑ申し
て置きたいものでは御座りませんか。」といふゆゑ、享主「成程さうぢや。
出た序に買つて來う。」と申して、或時柳原を通るに、古道具屋に誠に古び
た御釋迦様の木像を見かけたゆゑ、直段も安く買つて、持つて歸つて女房
にも見せる。

女房も喜んで佛壇へ入れ置きまして、翌くる朝見るに、あんまり汚れて
居るゆゑ、塵埃を拂ふに、はたくとて持出して見るに、ツイ下の蓮臺が抜
けて落ちると一緒に、何か紙に包んだものが落ちたゆゑ、ハテ何かぞ存じ、
拾ひ上げて見るに、古金三十兩ばかり、肝を潰して「是れ見い。」と女房
に見せて、「此のやうなものが出たが、どうせうぞいの。」と申すと、此の
女房も正直もの「どれ」と見て肝を潰し、「是は道具屋が知らぬに違ひはな
い。道具屋へやつたら取つて仕舞ふに相違は御座りませうまい。さりながら、
此の金を身に付けるも嫌なもの、大方俗家の佛壇で御座りませうが、佛様
さへ賣る程のことなれば、至つて貧乏人と見えます。先祖から入れてあつ
たを知らずに賣つたものと見えます。どうぞして本へ返したいものぢや御
座りませんか。」と申す一言、

ありがたい人で御座りますぞえ。我々もならこれは天から與へられた

柳原。神田にあり、附、兩國橋の附近にあり、店軒を並べ、居る。蓮臺。板に棒が二本付けた臺のこと。川を渡るに用ゐる。正し。の。筆臺が

のぢやなどと、無理に理を付けて、返すところぢやないが、此の二人の人は、格別亭主も正直人ゆゑ、一なる程さうぢや、能ういうた。おれもさう思ふ、段々賣本を探さば随分知れるであらう。」とそれから直に古道具屋へ行きて、何處から買った。「さ聞くに、仲間の誰々から買ったといふ故、そこを尋ねて行き、段々三元を尋ねて、とうとう賣土の内が知れましたゆゑ、行つて見ますに、本庄二ツ目の何町で、何屋の何兵衛とか申す内、近所で聞いて見れば直に知れましたゆゑ、その家を見ますに、表住居で間口も廣く、家作も立派、いかにも大家の様子、此の位の内で何ぜこの佛像を賣つたものであらうと、不審に思ひながら、格子の戸をからくと明けて、内へ這入つて見ますに、一人一人も居らぬゆゑ、案内すれども人は居ぬ様子、さらばとて、明店でもない模様、彼是する内、奥の方から出て來る人があるから見ますと、八十ばかりの婆様が参りて、「どちらから。」とい

うて不審の様子、

そこで申すには、「イヤ私はかやうくのもの、チト御尋ね申上げたいことがあつて参りました。どうぞ御亭主に御目に掛りたう御座ります。」と申したら、婆のいふには、「主人と申すものは疾うになくなりまして、今では私一人残りまして居ます。」といふ故、風呂敷を明けて佛壇を取出して、然らば是を見覚えありや。」と申しますと、ばばは一と目見て、はらくと涙を流して、「いかにも存じて居ます。扱もお恥しいこと、よい年をして佛様を賣拂ふなどと申すは、見下け果てた奴と思召も御座りませうが、是には段々わけのあること、以前は相應に暮して、召使ひも大勢御座りましたが、段々の不仕合せ、私の連合ひも勿論、打續いて子も孫も子の嫁も御座りましたが、皆一人も残りなく死に果て、商賣も次第くになくなり、奉公人も皆暇を遣はし、残つて行場のないは私一人、これぞと申して食べる業は

看經の禮を拜する
看經の行に
時佛の勤行
朝夕の佛前
修する
のこさる

出來ず、外にたよるべき親類とてもなく、死には死なれず、命長きは恥の
恥世間に申す通り、據なく、残つた家財を一つ賣り二つ賣りして、食へ
ば山をも盡すといふごとく、賣つては食ひく、やうく露命を繋ぐ此
の年月。モウ賣るものも盡き果てまして、残つたものは此の佛像、譬へ賣
拂うたきて、一日の飢を凌ぐ代りにもならねど、外にも家に持傳へた佛像
もありますから、現在の因縁も過去の悪業、せめての罪滅しの爲、朝夕の
看經佛に残しまして、その佛像は勿體ないが、たつた一食の爲に人の手に
渡しました。御恥かしき物語り、業ざらしの婆ご御推量下されませ、扱又
その佛像に就いて御尋ねなされたい御越意はさういふことで御座ります。
と申す故、懷より金三十兩包を取出し、
「柳原にて調べ、翌朝見ますと、是が這入つて居りました。さやう致して
見ますと、此の金子は此の家の御先祖の御入れなされて御置きなされたも

のと見えます。ぶしつけながら、佛像まで御賣拂ひなさると申す位のこと
とならば、餘程御不自由ゆゑと陰ながら存じましたから、奉公の暇を見合
せ、段々と本々尋ねましたら、早速尋ね當つて、私も喜ばしう御座ります
から、さらば御返し申します、御受取なされませ。」と差出しますを、婆は
推返し、「成程仰の通り、定めて先祖の入れて置いたことは存じますが、知
らずして一旦賣拂うたものゆゑ、私が受取る筈か御座りません。御前は御
正直な御方ゆゑ、天道様の御授けなされたもので御座りませうから、御前
の物になされませ。」と一向受取る氣色も御座りませんゆゑ、此の男も困り
果てて申すには、
「私不意に此の金子を得まして、悦ばしう思うて私用に立てる心なら、手
間隙かけて所々方々と廻廻り、尋ね申しは致しません。畢竟此のやうに不
意の仕合せは、永く快く存じませぬもの、またかう尋ね當りて御様子をも

見受け、御話しをも聞いて見ますれば、朝夕にも御困りなさるゝ程の御難儀、畢竟御先祖様が佛像の中へ、金子を何の爲に御入れなされて御置きなされませうか。自然御子孫に至つて、今の通り御難儀のこともあらうかと、遠い慮りから出たこと、私などは小祿なれども、主人より下されて、日々に困る程のことも御座りません。これは是非に御返し申します。」と理の當然に婆もいなむ辭もなく、「さやうなら戴きませう。扱もく有りがたい御人で御座ります。たごひ一家親類とても、不仕合せの時に、他人のやうに致すが世間の習ひ、何所のものやら知らぬものを、わざわざ御尋ねなされて御返しなされたいといふ御心。世に珍らしい御方、他人とは存じません。親先祖の生れ代りと存じ、御親切にあまへ、御頼み申したいことが御座ります。御聞届けなされて下さりませうか。疾に世を過ごされました私の連合ひが、昔から秘藏致しました茶碗が御座りますが、是ばかりは賣りも致

犬の食ひご
ごきは椀の
こと、御器
と書く

さず、今に大事に持つて居ります。假令ひ賣つても何程にもなりません。が、日頃大事にされたものと存じますれば、明日をも知らぬ老の身なれば、他人の手に渡しては、犬の食ひごきと同じやうに麓末にさりやうか。存じますれば、死ぬるにも何となく心の残るやうに存じますれば、どうぞ親切の人があつたら、その事を頼みて置きたいもの。日頃思つて居りましたが、かく零落れては、薄情ものゝ多き世の中、尋ねてくれる人もなく、心細く存じて居りましたが、永い世を渡る中、あなたのやうな御親切な正直の御方は、見たことも承つたこともない。かやうな御方へ御願ひ申して置きますれば、心の残ることは御座りません。此の婆が黄泉の障りを拂うてやると思召し、御邪魔では御座りませうが、さうぞ朝夕御使ひ下されませれば、ありがたう存じます。」と何か一つの箱を持來り、取出して見せまから、手に取つて見まするに、何かきたない古い茶碗で、直打もないもの

あうらぞと
の意な
朝がけ
軍にて早朝
に敵軍を襲
ふこと

つちが東、こつちが西といふことは何もない。それ故誰も憎むものがない。世界と一つものであつた一つの心。

それが年を経るに随うて、悪智恵といふものが出来て、おれが智恵、おれが體、おれが働く、おれがすると、おれがくといふものを組立て、立派なおれこいふ城廓を構へて、四方に大敵を受けて、夜討朝駈、少しもあくる間のない苦しき、それを此の心學に入つて、すつぱり我なしなものぢやと會得すると、今まで敵と思つたものは、丸で味方であつたものと知つて見る時は、助けられるものゝ爲に苦しんで居た、扱もくありがたい道ぢやと思ふやうになると、するこゝ爲すこと皆樂の境界、爰をさして極樂とも寂光淨土ともいうたもの、決して遠い所にあるものぢやない。此の身のまゝの成佛、これを悟るゆゑに、十方空と申しますから、どうぞ御修行なされまして、本心といふものを知つて御らうじませ。

平等一枚
平生一枚
思ふないか
とて

本心とは本の心といふことで、何も知らぬ本の赤子の時の心、此の心には萬物がちやんと備つて、上は天子將軍様から、下は穢多乞食に至るまで平生一枚の心、世界中の萬物が教へてくれて、萬物が働くの、微塵も我といふものは御座りません。それ故に、爰に孟子様が、萬物皆我に備はる。身に反さうして誠ならば、樂しみ焉れより大なるはなし。」と仰せられたので御座ります。

後 席

「善に善報あり、惡に惡報あり、善惡報なきは時節未だ到らず、深く耕し浅く植ぎり、尙ほ天の災ひあり、己を利し人を損じ、何ぞ禍報なからん。菽を種ゑて菽を得、麻を種ゑて麻を得。天網恢々疎にして漏らさず。若し善惡報無くば、乾坤必ず私あり。」

事林廣記
事林廣記
ことな
孫の著
集十卷
古今の詩人

數十人を載
せ皆先づ
詩を擧げ、
後に詩話を
載せたり。

これは事林廣記と申す書物に出てあります語で御座ります。至つてあり
がたい語で御座りますれば、是を今日の御話しの題に致します。

「善に善報あり、惡に惡報あり。」と申すは、善いことすれば善い報いがあり、
惡いことすれば惡い報いがあると申すことで、神儒佛三教とも、是は
一つこゝで、何も教を待ちて知るまでもなく、今日々々の上でもよう分つ
て居ります。先づ一つ二つあけて御話し申しませう。

朝早く眼が開いて、少し眠むたいけれども、それを堪へて起きるこゝ、そ
の時はチト苦しい様なれども、一日の用事が心の儘に出來て、夜も用事が
早く仕舞うて、早く寝られる故、心がかりもなく能う快寝されます。これ
が朝眠むたいを堪らへた善い報いと申すもので御座ります。

そこを朝眠むたいくで、眼が覺めても、ちつとくといつて、とうと
う枕元に日の當る時分まで寢て、眼が覺めると、イヤ今日は何處へ行かね

汝に出でた
るものは汝
に歸るもの
なり。孟子の
王子下篇にあ
り。節季の十二
月のこと。た
たいて來る
勢ひよく持
つて來ること

ばならぬ。長松をあそこへ使にやらねばならぬ。是もせねばならぬ。あれ
もあゝしては置かれぬ。何もかも一つにあつて、ごつた反した上で、一日
の中に仕たり、夜までもごたくしても出來きらぬ故、是も明日のこと、
あれは又今度のことと、あとまはりくになるゆるゑ、寢ても夢を見たり、
うなせたりして熟睡が出來ぬ。これが朝寢した惡い報いといふもの、凡て
のこゝが「汝に出でたるものは汝に歸るものなり。」と申して、手前からし
て出たことは、皆手前の身にそれだけのこゝが報つて來るもので御座りま
す。

私どものやうに貧乏人も、錢のある時は買ひ、ない時は買はぬやうにし
て居れば、節季に懸取りの來る氣遣ひない。これは平生不自由を憶えて居
る善報、それを平生思ふ通りにして、酒屋からも借りて飲む。肴屋からも
たたいて來て食ふこゝ、節句前には懸取りの提燈が、降るやうに來て苦し

節句・五節供のこ
と正月の
元且、三月の
月の五日、五
七月の七日、七
日、九月の七
九日、九月の
ふ。九日、九月の
昔はこの日
は休日、御
馳走などを
拵へたの

にやならぬ。

また人を呼ぶに、大きな聲では、「八兵衛。」と呼ぶと、八兵衛も大きな聲
で、「ハイ」と返事する。小聲で、「これ八兵衛よ。」といふと、小聲で「何で
御座ります。」といふ。皆こちらにする通りのもの、是程に報いといふもの
は厳しいものなれども、小人凡夫は眼の前のことばかり見えて、始終のこ
とまでには目が届かぬゆゑ、隣の長松はあれ程親に孝行で、家業を精出す
けれども、あの通りに年中苦しみ通しぢや。又横町の六助は、親にも不孝
で、酒は好き女郎は買ひ、家業はなまけるが、あの通りに仕合せよく、さ
うかかうかして行く。さうして見ると、よいことすれば善い報いが来ると、
一樣にも言はれぬ。天道様も當にはならぬものぢやなどいふが小人の常、
かういうたものは、世の中には多くあるものぢや。
成程よい人にも仕合せがわるく、悪い人にも仕合せがよいのも、随分あ

不義に於て
富み且つ貴
きは云々
論語述而編

るもので御座りますが、それは手本にはならぬこと、是等は天道様の算用
のまだすまぬもの、天道様の御勘定がすつぱり濟む時には、必ずその報い
がなけらにやならぬ筈、孔子様時分にも、こんなものがあつたと見えて、
「不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。」と仰せられて、悪い
人の當時金もあり位も高く居るのは、とんと雲の根のないやうなもので、
暫らくの間のごとで、直にばつミ散つて仕舞ふもの。此の天道様の算川に、
分厘毛忽も間違ひはない筈のもの、これはまだ時節到来せぬゆゑぢや。そ
れを爰に「善悪報なきは時節未だ到らざるなり。」といつて御座ります。そこ
を百姓の農業の事に譬へて、「深く耕し淺く植ぎるも尙ほ天災あり。」と申し
てその理を説いたもので御座ります。

百姓が米を蒔いて田を作るに、誰しも能く作らうくと骨を折つて、暑
さをも厭はず、勞れをかまはず、饑饉せぬものはなけれども、一昨年のや

うに降續いたり、又日照りであつたり、暑い時分寒かつたりして、凶年といふものがあつて、何と思つても出來の悪いことがあります。これは百姓の悪いのではない。

今日の行ひの上でも、身を慎んで行ひを磨ぎ、善いことは爲、わるいことはせず、何一つ缺けたことのないやうにしても、禍に逢ふ人もあるものぢや。

處をよい加減にして、此の位のことは大事あるまい。八兵衛あの位のことは程のことは善いよ、投遣り放題に、心の儘に行ふ時は善からう筈がない。例へ凶年でも骨を折つて置けばこそ、いくら皆無ぢやというても、少しは出来る。それを凶年を手本にして、放つて置いては、猶々出來ぬ分で御座ります。

そこで悪いことすれば悪い報いがあるし、善いことすれば、善い報いが

體は情の用、體は動の用、方又體、方又體、本體又體、用は象で、用は象で、應用は應用、應用は應用。

ある。ぢやによつて爰に「菽を種ゑて菽を得、麻を種ゑて麻を得。」といふたとへを取つて、丁度菽を蒔けば豆が生え、麻の種を蒔けば麻の出來るやうなものぢや。つひぞ麥を植ゑて米の出來たこともなく、豆を蒔いて麻の生えた事もない。善を爲せば善が生え、悪を行へば悪が出来る。あの麥にくろほご申すものがあります。あれは去年麥の内、本眞に實の入らぬ生麥が交つて居たを蒔くと、此のくろほになつて、役に行たぬもので御座ります。

佛家で地藏菩薩と唱へるものは、此の大地の徳を祭つて、地藏というたもの、また虚空藏菩薩と申すは、この虚空の何もない、儒道でいふ處の天の徳を表して、虚空藏とあがめたので御座ります。此の大地の徳と天の徳とは、體と用とを申したものの、形のある米や麥や豆や、形のあるものを此の大地に蒔く、蒔いた通りに形のあるものが生えます。米を蒔けば米、

八三四
麥を種うれば麥が出来る。それゆゑ麥一粒まけば、百増萬倍にして御返しなされて下さるが、地藏菩薩の徳、これは形があるゆゑ、誰にでも見えて知れて居る。

また爰の虚空藏は、形がないから目には見えぬが、爰へ形のない善や悪の種を蒔いて置くと、目にこそ見えぬ。いつの間にかやら蒔いた百増萬倍にして、ちやんと返して下さるが、凡夫小人にはどうも、豆や麥を地に植ゑて、きつと豆や麥が出来るやうには眼には見えぬ故、さうは思はぬから、是程のことは善からうくと悪い種を蒔いて居ります。畢竟は形のないものも有るものと、蒔きどころが違ふばかり、

伊勢國、關三といふ宿に關の地藏とて、名高い地藏さまがあります。その縁起に委しく書いてある面白い話がある。

昔、關の里人、大勢よつて石の地藏を建立して、立派に出来上つた所、

開眼佛家
にて佛像落
成の時行ふ
儀式の御目
と。御目あ
け。紫野山
國にありて
七條の袈裟
法師の肩に
かけて衣の
上に被ふも
の五條衣、
七條衣、大
衣等がある

百姓の評議には、「よう出来たれども、地藏さまに肝心の魂が這入らぬ。どうぞよい御出家さまを招請して開眼してもらひたいものぢやが、誰がよからう。」といふと、一人の百姓が「誰それといはうより、當時智証紫野に御座る眞珠庵の一休和尚こそ、太徳の御出家さまゆゑ、行つて願うて開眼して貰うがよからう。」と一決して、紫野へわざと参りて願ひますと、一休和尚早速承知して、来る何日と約束して、その日になりますと、里人男女老少群集して、

今度一休様が御出なされて、地藏様の開眼なされるさうなご、夥しき見物、定めて七條の袈裟で、立派な衣でも召して御座るであらうと思つて居る所へ、一休和尚は汚なけな乞食坊主のやうな破れ衣を着て、ずつと其所へ出ましたから、見物のものが「あれが一休和尚といふか。扱もく汚たない坊さま。」と思つて見て居ると、頓て地藏の前へ立ちはだかつて、經で

●庄屋
●一村又は數
●の村をさ
●のりことな

も讀むかと思ふも、經も讀まずに里人に向つて、これが今度出來た地藏か。「よし」といふて、前をまくつて、地藏の頭から小便をかけて、「さあ是でよい。」とあとをも見ずして出て行くから、里人も「あれはさうぢや、氣が違つたのかと呆れ果てゝ見て居るも、里人の中でも、重立つた庄屋體のものが、「あの坊主はあんまりな奴ぢや。何しろ勿體ない。早く水を持つて來い。」といふて、洗ふやらこするやら、大騒ぎして、善う綺麗にして、どうぞ外から善い御出家を頼んで、祭り直して貰はうと思つて、その夜は先づそれぎりに致して居た所。

その晩に、村中のものゝ枕上に地藏さまが御出でなされて、「今日貴い智識の開眼を受けたる所、水を以て洗ひ落すとは、如何に愚民どもこはいへども、不埒千萬、此のまゝに差置きなば、村中に祟る間、左様心得よ。」との夢知らせに、目が覺めて膽を潰し、互に、わしもその夢を見た。誰もそ

●縁起
●社佛閣
●草創の由來
●を書きたる

の夢を見たといふ。そんなら此の儘に置いては、どんな咎めが出來るやら知れぬ。一刻も早く一休さまを呼返すが善からうも、二三人駈け出し、やうく渡場で一休和尚に追付き、かやうくと委しく話して、「どうぞく直に御歸りなされて下さりませ。」と手を摺つて佗言しますと、一休は、「さうであらう。もうおれが歸るには及ばぬ。是を持つて行つて、地藏の首へ巻いて置けば、それでよい。」といふて、懐に手を突込んで、汚れ糞丸の膏で、眞黒になつた犢鼻褌をはづして、出しましたから、里人も又仰天して、「これを巻きましても善う御座りますか。」と尋ねましたら、一休、「それでよい。解いては悪いぞよ。」と申した。あんまりなこごごは思つたれども、初めの所行を知つて居るゆゑ、持つて歸つて地藏の首へ巻きましたが、それで何事もなかつたといふことが縁起にあります。そこで今では關の地藏の襟には、何だか切れで巻いてあります。あれが一休の褌ぢやと申すこと

で御座ります。

是が一寸聞くと、馬鹿々々しい咄しのやうに御座りますが、理を詰めて見るに、成程と思ふところが御座ります。一休和尚は、地藏といふものは、何を指して地藏といふ名を附けたものといふ、生きた地藏に逢うて知つて居るからのこと。それで小便をしかけたので御座ります。なぜいふと、此の地といふものには、小便と大便が肥のいつち尊いもの、此の上はない。豆や麥を蒔いて、いくら法華經や念佛や、四書五經が尊いものぢやないで、百姓の智識が集つて、毎日々々田の廻りで御經を讀んでも、何にもならぬ。又四書や五經を刻んで入れたとしても、一杓の小便ほごにも利かぬ。そんな死んだものではないかぬ。生きた正眞の小便で開眼せにや、地の徳を助くることは出来ぬといふことを知つて、一休は小便をしかけたので御座ります。

そこで此の虚空の何もない大きな藏の虚空藏菩薩の中には、天地萬物が一ぱいに詰り切つて居ても、目には見えぬが、あればこそみんな此の中から出るに違ひない。畢竟は地から萬物を生ずるといふは、本を推せば爰の働きを以て居るものゆゑ、爰の陰徳を精出して蒔いて置くに、百層倍にして下さります。悪を蒔くもその通り、何でも蒔いて置いた通りのものが生えます。

子を育てるもその通り、親父が汗しぢぢになつて、金銭財寶溜めて置いてやつても、精出して書物を讀ませて博學にして置いても、色々と藝能を仕込んで置いても、たつた一つの心掛が悪いと、何にもならぬ。それよりしつかりと教へを立て、厳しく行儀作法を仕込み、どうぞ心學でもさせて、本心といふものを知らせて置けば、大丈夫になる。

子の悪いは皆親の仕業、娘を持つてモウ片付ける時分になつて、外から

縁談のことというて来ると、親が第一に聞くには、「舅の年は幾才位。」といひます。仲人、「まだ四十位で御座ります。」といふと、親父が、「それではまだ先が長い。何も善う御座りますが、先づ見合せませう。」仲人が、「舅は七十五六才、姑は七十ばかり。」といふ。「モウそれでは間もあるまい。どうぞ相談致したう御座る。」と娘のまへでいうて聞せるから、娘は、成程舅といふものはむつかしいものと見えると、舅の死ぬるを悦ぶやうに教へて置くのぢや、萬事かやうに教へ込んで置くゆゑ、向ふへ行つて少し容貌でもよいと、おれはよほご美しい。中々こんな内へ来るのではなかつた、どこそこからも貰ひに来たが、縁でけなあつたらう。こんな内へ来るといふは因果なごこ。その上に模様ものが五通りに、夏ものが一たんす、帯が十筋、簞笥が五荷に、長持が七掉と數へ立て、段々と鼻が高くなつて、その天狗のやうな鼻で、あちらこちらとつき廻はして、そこらあたりへぶつつかり

模様のものが、
模様の付が、
模様の付が、
と。衣裳のこ

三界に家な
三界に家な
しとや野邊
の女郎花
毛吹草

廻つて、家内中を横行するゆゑに、小姑や姑も仕舞には居所もないやうになるから、十日も立たぬ間に御拂箱、追出されて来ても、自分の教の悪いことには心付かず、只向ふばかり悪いものゝやうに思つて、やれ／＼不仕合の娘、とんだ所へ遣つた。よし／＼また善い所があるであらう。そんな所に居ずともよいと、跡の紐を付けて置く。
何のことはない、猿のやうに後紐を付けて、御雨親が引張つて居るやうなもの、舅がやかましくば出て来い。必ず隠し居て病つて呉れるな。命あつての物種ぢやと引張る。婚殿がひきくするなら出て来いというては引張り、たべ物が悪いといつては引張り、さう／＼親が引張り返して置いて、不仕合せな娘ぢやと思つて居るといふは、情けないもので御座ります。
さうど平生から女の子持つたら、善う言つて聞かせて置くべきことは、女といふものは三界に家なし。嫁入りしてからは、夫の家を家とすさいう

て、一旦嫁入りして後は、モウ里の両親は両親ぢやない。向ふの両親が本眞の両親ぢや程に、モウ此の家の敷居をまたいでは、生きて戻らうと思はぬが女の生涯の志といふものさういふことを、くれぐれもいうて聞かせて、それが耳へ染みこんで居るさ、そんなことは決してありやせぬ。

平生は悪いこと聞きならはせ、言ひならはせて置いて、外へ嫁入る時になつて、暇乞する時、泣きさうな聲で、先へ行つて御両親を大事にせい位のことで、聞かう筈がない。婚禮の時に、仲人が「千秋萬歳、千箱の玉を奉ると、謠ふは、何のこころ思ふ、平生能く教へ込んで置いたが千箱の玉。口先ばかりで千箱の玉を奉るで、糞や芥を一ぱい詰めた箱ぢや。何にもならぬ。平生詰め込んで置くものが違つて居る。世間の、人の子を可愛がるさういふは、みんな悪がるのぢや。

丁度猫が子を可愛がつて、甜めたり乾かしたりして、揚句の果には食う

て仕舞ふやうなもの、わきへ嫁らしては引張り戻し、又やつては呼戻して置いて、不合せなもの〜と思つて居るは、何のこころはない猫の可愛がりといふもの、皆親の仕込んだこと、私の毎度御話し申した、大根やの息子に嘘を教へて、返答に困つたやうなもので、嘘といふ種を蒔くと嘘が生える。皆親の仕込んだもの。

横さまに這うて教へた蟹の子に

直ぐに這へとは無理な親かな

どうぞ正眞に子が可愛くば、心學をさせて本心を知らせて置きたいもの。心學ばかりぢやない。三教の極意は、此の本心を知るばかり、石田先生が此の心學を御開きなされて、どんな文盲なものでも志を立てさへすれば知れるやうにしてあります。どうぞ御子さまを御持ちなされた方は、御修行御させなされませ。

しかし此のはなしを、子供衆や若いものが御聞きなされるに、己の野良こいだり、酒飲んだり、女郎買うたりするは、皆親の仕込んだものぢや。おれのするのぢやないと思ふに了簡違ひ、親御様は大酒飲つしやつても、酒といふものは悪いものぢや。どうぞあれには飲ませともないと思召すは知れてある。

横さまに親は這へどもさながらに

蟹の子ぢやとはいはれともなし

爰が親の情けを察して、親子さまにスツバリなつて仕舞ふが孝行。人は孝行さへあれば、外の少しのことは消えて仕舞ひます。孝は萬善の長で行ひの本、此の孝行の種を蒔いて置くと、どんな結構なものが生えやうも知れぬ。是について咄が御座ります、

丁度今月の十五日が、永代橋の落ちて、人のいかいこと死にました三十

内障は變る
外見は千が
所が瞳く
日かなく
動かぬ
病の見えぬ
眼物

池の端
下の野
谷の
り園の
下に
あ公

三年忌に申すに就いて、その頃承りました有りがたい孝子の咄故、つまんで申上げませう。

頃は文化二年丑の年、永代橋の落ちた三年前のころ、江戸小舟町邊の豆腐屋に親父が御座りました。女房は疾うに死んで、後に残つた二人の娘が、男親の手で育て上げて、此の時姉は二十四五才、妹は十六七に成りました所が、此の親父が内障で、かいくれ眼が見えなくなりました。兩人の娘が至つて孝行で、杖とも柱とも思ふ親が、眼が見えなくなりましたから、甚だ苦勞致しまして、療治は素より、神に佛に祈誓致し、身に代へ命を差上げて、信心を凝らして、色々に手を盡したれども、聊もその詮なく、只心を痛めるばかり、

姉が何所やらから聞いて参つたは、池の端近所で、俗で眼の療治に巧者なものが有るといふことを承つて、どうぞ夫れに一遍見て貰ひたく思ふ

て、自分が手を引いて連れて行つて見せましたら、是は内障眼ないしょうがんというて、俗ぞくにそこひといふ症しやうで御座るが、随分療治りょうぢをしたら直らぬことは御座らぬが、一通りの薬では逆も聞かぬ、餘程金子が入るが、前錢出さねば拵こしらへやらぬといふから、姉がいふには、直りさへ致せば、どうかかうか致して参りませうというて、内へ戻つても貧乏の身上しんじやう、その上に親父は眼病がんびやうで、家業は半分も休み同様、それに療治の祈禱いのちのま、物入りが重み、ちつこばかり有合あひあうたものを賣つて、その日を過す位、中々若い女の手で五兩といふ金が出来る筈はずもなし、さういふて金さへあれば直るといふに、療治して貰はぬといふも残念ざんねん。とやせんかくやせんご思案しあんに落ちかねて、色合いろあひも悪しく食事しょくじも食ひかねるを、妹が見て、

「どうやらお前は氣合きあひが悪い様子、此の上にお前まへが患かまうて下されては仕方がない。さうぞ様子を聞かして下され。」と尋ねられましたら、「よう尋ね

てくれた。そなたに咄はなしても氣を痛めるばかりで、思案しあんあるまいと思ふから言はなんだが、その優しい志こころざしいはぬも却つて案じさすやうなもの故、咄はなして聞かせるが、外ほかのことでもない。此の間、池の端の醫者いしや様のいはしやるには、かうくいうてぢやが、どうも知つての通りゆる。金の才覺さいかく出来やう筈はずもなし。去りながら、金子さへありや直るこいふことゆる、どうかして工面くめんも出来やうかと思ふ色目いろめが顯はれて、色も悪わるうなつたものだらう。」といふを、妹ちつと聞いて、暫らく考へて、

「申し姉さん、よいこそ思ひ出しました。不束ふつな私なれども、身を苦界くるがいに沈めたら、どうか五兩位ごりやうゐにはなりさうなもの、その金で父さんの眼めがよくなりさへなされたなら、私はさうでも能よう御座りますから、どうぞさうして下されませ。」といふを、姉が聞いて、「オオ能よう言いうて呉れた、わしぢやめて其所そこに心の付かぬでもないが、わしはもう年も廿四五なりや、勤つとめの

幸のなきこと
不幸のこと

間もないことゆゑ、金にもなるまいし、又そなたは年も行かぬから、後に残つて父さんの御介抱もちと行届くまいと思ふから、こなたを代りにやつたら、年も若し、器量もわたしよりは勝れて居るゆゑ、善からうとは思へども、兄弟の中でもこなたの心を測りかねて、黙つて居たが、さうしてくれれば、外に思案も工夫も入らぬ。そんなら親御様の御爲と思つて、御苦勞ながら頼みます。」と涙に交るひそくばなしに、世のさちなきを取交せて、兩人手に手を取あうて、暫く泣いて居りましたが、

かうして居ても埒の明かぬこゝゆゑ、一刻も早い親御の爲に、姉が早速人を頼んで、妹を吉原へ勤め奉公にやりました、その五兩の金を懐中して急ぐ道すがら、悲しいやら嬉しいやらで、足の運びを忘れて、池の端へ行つて醫者の玄關へ上りまして、懐を探つて見れば金はなし。若もと袂を振うて見ても、帯を解いても一向見えぬ、慥に懐中して来たに相違はない

初夜の今頃の十時

が、餘り急いで来たゆゑ、落したものと見えるは思へども、仕力なく、又外へ出て、もし其所か此所かと来た道を、きよろしく見尋ねながら、狂氣のやうになつて探しても、人通り繁きことなれば、假令落してもあらう筈はなし。

どうしたら善からう。折角千辛萬苦して、妹に勤め奉公までさせ、やうく出来た金を、落しましたと内へかへり、親御様は素より、吉原の妹にも何の面目あつて言はれう。此の言譯には死ぬるより外に仕方はないと思ひ込んだる一念に、ぶらりくとたどる内、もう夕方にもなりましたから、死ぬる所は永代橋と覺悟を極めて、永代橋へ行つた時は、モウ初夜過ぎ、人通りも稀になつて、殊に宵闇、折よしと欄干に手を掛けて、已にかうよと存じましたが、思ひ廻せば我なき後、目の不自由な一人の父さん、殊に妹は居らず、誰をたよりに成らりようもない。命はさらしく惜しくはな

いが、死んだ先で、冥途の唄さんに何と言分しやう。また此の世に御座る父さんには、不孝の御にくしみ、勤めして居る妹には、腋甲斐ない姉と愛想づかし、これもそれも前世の約束と、欄干に憑り掛つて忍び泣き、思ひ直して、逆も生きては居られぬ身と、思ひ切つて身繕ひする向ふから、ぶら提燈に闇を照らして来るものあり。見附られては詮なしと、己にかうよと見えたとたん、今の男が通りかかりにしつかと抱き留め、「是れ待つた。」といふは、或る相應の商人の子息で、深川へ通ふ道すがら、遠目に女の欄干に凭たれて居るを見るから、是は大方色事とかいふやうなことで、身を投げやうといふ不了簡であらうから、先づ留めて様子を聞いて見やうと、足を早めて留めたので御座ります。

さうすると、その女が、「どうぞ放して殺して下されませ。」と申すのを、構はずしつかりと押へて見れば、見悪い女でもない。いよく是は若けの

膝とも談合。
毛吹草といふ書にあ

不了簡から出たことと思ひながら、「そなたは何で死なうとする。大方何處にもあるならひ、狭い女の心から、死なうとまで思ひつめたものであらう。膝も談合とやら、先づ一通りいうて見やれ。」といはれて、恥かしさうな涙を拭いて「御尋ねに預りますから、恥を隠して御咄し申します。」というて、親の眼病から妹の身の代を落したこゝまで、咄します言葉のはしく、咄でない様子に、此の男も二人の女の孝行を感心して聞いて居ましたが、何思うたか、懐から金五兩出していふには、それなら死ぬには及ばぬ。是さへあれば言譯が濟むこと、ちつとも早く持つて行つて、藥を飲ませるやうにさつしやれ、」といはれて、女も飛び立つやうに嬉しく、「ありがたう御座ります。さらく命は惜しくは御座りませんが、此の五兩の金があれば、三人の命にかかる御恩、何國の誰殿か知れぬ御方から戴くわけは御座りませんが、かう詰つて來た時なれば、御辭

●禮へてはこ
●ら
●思はれな
●ふてのい
●かか
●とて

退致さず戴きますが、せめて後日に御禮になりとも、上りたう存じます。

八五二

どうぞ御名所を承りまして置きたう存じます。」

男「イヤ〜おれは親に隠して遊びに行く道、禮にはこらへて迷惑する。名所を聞いたゆゑ、又こちから尋ねて行くこともあらう。縁があらば又逢ひませう。それよりちつとも早く歸らつしやれ。嘸親御が案じて居られう。」
「そんなら歸ります。」言捨てて、元來た道へさつくと歸つて行きますから、提灯の影の見えるまで拜んで居りましたが、夜も更けるから宿へ歸つて、遅くなつた一伍一什を咄せば、親父も肝を潰して、「それはあぶないこと、そのマア御方は何所の人であつたらう。感心な人もあつたもの、どうぞ縁があつて、御禮など言ひたいもの。」と咄しながら、その夜はそれで、明るる朝から療治にかかつた所、孝心の通じたのか、藥の驗のあつたのか、ややあつて、親父が眼病も直つて、平生通りになりました。

その後も時々、助けしてくれた若い男は見覚えて居るさいふから、どうかして一度は逢つて禮を言ひたいものと、毎日〜言出さぬ日はないやうで、娘も往來の人に心を付けて、若もその人が通ふかと、明暮氣を付けて居ました所、つひぞ似た人にも逢はぬこゝ、丁度三年の間、それから文化四年卯の年八月十五日は、深川八幡の祭禮で御座りまして、何處もかも人の往來多いゆゑ、若し今日らは人の通るこゝもあらうかと、往來に目をかけて居りますと、單衣を着て尻をからけて、肩に萌黄の風呂敷包をかけて、すたく〜と通る人があるを、ちろりと見るさ、その人に違ひないから、娘は直ぐに徒跣で駈出して、

「慮外ながらちと御聞き申したいことが御座りますが、もし三年前に永代橋の上で、何月いつ頃かの夜、御前から戴いたものが御座りますが、もしその御方では御座りませんか。」男「成程いかにもそんなことがありました。

親父殿の御眼はどうで御座りましたか。」といふから、「そんならそれに違ひはないと存じますから、どうぞ鳥渡御出でなされなれて下さりませ。」「イヤちと急ぐことがあるから又参りませう。今日はどうぞ御免しなされて下さりませ。」女「イヤ又と申しても御出でなされますまいから、御手間は取らせません。」と、無理に袖を引いて離さぬやうに致すから、據なく内へ這入ると、「親父さま〜。年頃尋ねた御方様が御出でなされました。」といふと、奥から親父も飛んで出て、

「ヤレ〜よう見附けて御連れ申した。扱段々娘が咄して承つた。全く娘の命の親、私の眼病平癒もその御蔭、いづぞ御目に懸つて、せめて一言の御禮も申上げたいと、毎日〜二人で申出さぬことも有りません。いづくの誰殿様さふこと知らねば、蔭で御禮を申して居りました。」「イヤモ御禮ども痛み入ります。今日は急ぎのことあるゆゑ、又参りませう。」

ヤ御手間は取らせぬ。まづ見苦しい内なれども、こちへ御上り下されませ。今御禮をいはねば、又と申して申す時ありません。」

男「その御禮はこつちから申してよいことが御座ります。私もその時までは親の溜めた金を盗み出して、榮耀に費し、何とも思はずに居りましたが、その時娘子様の眞實あはれな孝行の咄を聞いて、扱も恥しいことぢや。今までの行作を後悔して、その時すぐに心が入代つて、コレ御覽なされませ。今ではこんなしみたれな形をして、自分で風呂敷包を背負つて、奉公人と同じやうに稼ぐ一とまきになつたは、ひとへに此方の御娘子の御蔭、五兩や十兩の金ぢや買はれぬ。それまでは親の意見も師匠の教も、馬の耳に風、所がたつた一言の御娘子の咄が説法になつて、得道しましたといふはありがたいことと、此方から御禮いうてよいので御座ります。深川まで急な注文持つて行きますから、今日はモウ御暇申ませう。」といふ内に、

酒や肴を出して引きとどめますゆゑ、據なく一ツ呑み二ツ呑んで居る内に、外の方が何か騒々しい様子で、人が大勢逃けて行くから、火事でもあるかと思つて出て見ると、向ふから鉢巻で、膚脱いで駈けて来る人に、「何事で御座りますか。」と聞くに、「今永代橋が落ちて、夥しい人死ぢや。」というて駈けて行く。後で考へて見ると、その男が留められたを聞かずに行くに、丁度永代橋へかかる時分であつたに申します。

善に善報あり、悪に悪報ありで御座ります。三年が間知れずに居たは、時節未だ至らぬので御座ります。人の命を助けて置いたからといふ種を蒔いて置いたから、己が命も助かるといふものが生えました。助けた所は永代橋、助かつた所も永代橋、「天網恢々、疎にして漏らさず。」で、天道様の網は目が荒いやうでも、外れることはない。恐ろしいもので御座ります。それからその男も内へ歸つてそのことを咄しましたら、その男の親父の

申すには、「さうして見れば、その内の二人はそちの命の親、又そちの心の入代つたもその娘の御蔭、さういふ篤實なものは、以來親類同様につき合つたがよい。」と申すゆゑ、さうくは吉原の妹も請出して、永き世話を焼きましたから、今では繁昌して居りますと申します。

さう見ると善も悪も必ず報いがあるものに相違ない。悪いこともひつくりかへつて善いことになり、よいこともひつくりかへつて悪いことになる。持つた心の一つから、向ふから来る禍福は禍福ではない。己が身から出た禍福が眞の禍福といふもの、天道様には必ず依故最負といふことがない。これを「乾坤必ず私なし」と申します。「先づ長う御座りますから、今日は是ぎりに致します。」

心學道の話第八篇

漢の昭烈將に終らんとす、後主を救めて曰く、「惡の小なるを以て之を爲すことなかれ。善の小なるを以て爲さざることなかれ。」

これは皆様御案内の小學嘉言の編に出て御座りまして、誠にありがたい語で御座ります故、今夕の御咄の題に致します。

漢の昭烈皇帝と申すは、皆様御案内の三國の時、蜀の國を領して居りました蜀の立德と申す人で、その御方が御隠れなされます時、御跡とりの太子禪と申す御方に、御遺言なされます時の御言葉、後嗣といふは、跡取りのこと。その御遺言の趣は、「惡の小なるを以て爲すことなかれ。」と申すは、これは悪いと氣の付いたことは、さのやうな少しばかりのことでも、決してするなといふこと。又「善の小なるを以て爲さざることなかれ。」とは、

小學朱子の作に
嘉言の名

是はよいことと心づいたことは、假令聊かのことにも、必ず捨て置かすにするやうにせいと申すこと。たつた僅の語で御座りますが、結構な戒御座ります。

凡て凡夫小人と申すものは、大きい惡事は悪いことと知つて居りますが、小さい惡事は心付かぬ。又悪いこと心付いても、此の位なことは構ふことはないと思ひ、善事も此の位のことは何にもならぬと思つて致しませぬ。善事も大きな善事でなければ役に立たぬと、頭から大きいことを仕やうと思ふが、凡て天地の間に、初めから大きいものはない。初めは皆小さいもの、その小さいものが段々大きくなつて、太るのが當り前といふもの。

あの柱になつて居る木も、初めからあのやうに大きい木ではない。初めは口髭ほきの木が、ぢりりくと大きくなつて、あのやうに柱にも使はれる丈に育つたもの、御前様や私どもの體でも、初めから此のやうに大きく

八六〇
はない。小さい赤子であつたのが、ぢりりくと太つて、此の位になつたので御座ります。

吉野川その川上を尋ねれば

むぐらの栗萩の下露

此の後を流れる川の水でも、そのすんご本を尋ねて見ると、山奥からほとりく、松の露の、萩の栗のこいふやうなものなれども、あの通りに舟や筏を浮べるやうな川になります。漢の韓信のことをよんだ歌に、

ながれては海なるべき谷水も

しばし木の葉の下くぐる也

韓信と申した人は至つて堪忍強い男で、始めまだ賤しい時に、市人が何時か恥しめて遣らうと思つて居た所、丁度韓信が通りかかるを呼止めて、「その方大丈夫ならば、おれとたたき合つて勝負せよ、若しそれが怖くば、此

むぐらの栗萩の下露
種、の字を書
く庭、荒れた
る庭、なごに
生ずる、雑草
てある、雑草
漢の韓信、な
沛公、前に註
せり、前に註
ながれても
の歌、閑
伴、閑
田、閑
は、句、閑
と、ひ、閑
谷、水、と、あ
り、水、と、あ
立派の男
と、い、ふ、こ

の股をくぐれ。」と申した時、韓信の思ふには、我は大望ある身分、かかる小人を相手にして、身を過つものではないと思案して、熟視するといつて、篤きその男を見て、そのものの股をひろけて居る所を、罰匄になつて罽丸の下をくぐつて、向ふへ出たを見て、大勢が一度に手を打つて笑うたが、さうくは負けて笑はれたものは、齊といふ國の御大名になつて、將軍の位に登りました。笑うたものどもは生涯に備取りで仕舞うたと申すことをよんだ歌で御座ります。

大海の大船を浮べるやうな水でも、初めは山から出るほたりく、さ出て、木の下をくぐつて流れ出たもの、何でも初めは小さいものが大きくなるが道理、易の語にも、霜を履んで堅氷至る。」と申して、即ちあそこにかかつて御座ります額の語で御座ります。あれは何をいうたさいふに、水の堅くなつたものは岩よりも堅い様に御座ります。初めからあのやうに堅いもの

霜を履んで
堅氷に至る
此の説も少
しをかしの
前に詳しく
註して此の
誤を訂して
あるから見
るがよいか
つむりてん
あたまを打
つて、幼兒
と、幼兒の
手藝、一
手うちく
両手を打つ
て音をさせ
ること。幼
兒の手藝
の、一つ。

七條河原で
釜入り
京都の七條
河原で釜ゆ
せて刑に處
せられたこ
と。

ぢやない。初めを尋ねて見ると柔かな水、それが一段凝ると、雪や霜となる。その雪や霜の降つた所を、履みかためくした上へ又降る。又履みかためくすると、どうくは岩より堅く、滅多には割れぬやうになるを、「霜を履んで堅氷至る。」と御説きなされたもの。

何をいうたものといへば、人の心が丁度あの通り、生れた時は誰でも可愛らしい赤子、石川五右衛門ぢやとて變つたことはない。やつぱり「つむりてんてん。」「手打ちく。」「あわわあ。」で育つた、嬌りのない可愛らしい赤子、それが何時の間にか、此の體を可愛がる心が重りくして、悪人になつたもの。

初めは皆此の位のこととは誰もする、彼もすると、ぢりぢりくくと積つて、大きく成ると、終には七條河原で釜入りになるやうになります。それ故に昭烈皇帝が「悪の小なるを以てするこゝなかれ。」と、おつしやつた

もの。

かばかりのことはうき世の習ひごころ

心にゆるす果ぞ苦しき

必ずく油断するなよこの御遺言で御座ります。あの火事になつて江戸中を焼拂ふやうな火も、本は煙草の吸殻位の火から起るのぢや。

或人煙草喫んで居て吸殻落す。側から「それ吸殻が落ちた。そのまま置くと火事になる。」といふを、その男落付いて居て、「何あれは煙草の吸殻、火事ぢやない。」といふ内に、段々と疊が焼けると、「それ疊が焼ける。火事に成るぞ。」といへども、何あれは疊の焼けるのぢや。火事ぢやない。段々と板敷が焼けるから、「それ早く消せ。火事になる。」「いやありや板敷の焼けるのぢや火事ぢやない。」と落付いて居ると、段々柱や天井へ付くから、「それ早く消せ。火事になるから。」といへど、やつぱり落付いて居て、「何ありや

太鼓を打つ
徳川は火事
消防には太
の時は火事
鼓を打つた

つかふどの
のふはな
の誤りであ
らぬこと付
あからう。

天井の焼けるのちや。まだ火事ぢやない。「そんなら火事さいふはどんなものが火事ぢや」と聞くと、「そりや知れたこと、火消しが纏ひを持つたり梯を擔いたりして來り、馬に乗つて駈廻るが、火事ぢやさいふ。」家根へ燃えぬいて、ほうくくと半鐘や太鼓を打つ時になつて、初めて火事ぢやと思つて居る、初め煙草の吸殻の時消せば指一本で消せる。

親父様や御主人様「コレ長吉よこれをせい。」とおつしやるさ、「ハイハイ。」と機嫌よくすればよいのを、「長吉」といふと、又使ひかと思つて返事せぬ故、親父がおこつて、「コレ長吉く。」といふと、「何ぢやいの。」と、つかふどのふ返事するが、モウ日本橋で三日さらされて、二間木の上へ大の字なりに括られて礫になる親殺し主殺しの罪の芽生え、丁度煙草の吸殻の落ちたを、ありや火事ぢやないと落付いて居るやうならぬ、此の位のことこは、此の位のこととはいふ油断から起る。そこで油断大敵と申す歌に、

我よしと思ふ心ぞ愚かなる

必ず鬼の住家なりけり

或處に痰醫者さいふがあつて、何でも痰ぢや痰ぢやさいふ故、人が痰醫者さばかり名を呼ぶ。頭痛がする、それも痰。が痛む、それも痰。手が痛む、夫も痰。何でもかでも痰と計りいふ醫者ぢや、所か若いものが喧嘩して、拔身で斬られた故、その痰醫者さのを呼びにやる。早速に駈付けて來て、「何斬つたのか。されく。」と見て、「イヤこりや痰ぢや。痰ぢや。」「イヤへく斬られたので御座ります。痰ぢや御座りません。」「イヤやつぱり是が痰ぢや。これは大膽といふたんどぢや。」さいうた。

若し又若い女と男と心中、二人ながら死にそこなつて苦しんで居るから、痰醫者を迎にやる、又駈付けて來て見て、「コレモ痰ぢや。」「イヤ御醫者様、滅法界な。コリヤ心中して死にそこなつたので御座ります。」イヤく痰ぢ

や。コリヤこんたんといふたんぢや。

全體それに手後れといふが癖の醫者、また二階から落ちて目を見詰めたから呼びにやるミ、駈付けて来て、介抱して居る人の手を握るから、「イヤこりやわたしが手ぢや。」「ナニ此の騒動の中では、誰が手の彼が手のといふところがあるものかい。」「夫でも病人の手を見て下され。」「どれくと握る。」から、「それは足で御座る。」といふミ、「どれくと手を取つて、成程氣遣ひない。追付け氣が付きさへすりや直る。これも痰ぢやの。」「イヤ痰ぢや御座りません。二階から落ちるので御座ります。」「イヤやつぱり痰に違ひはない。油断といふたんぢや。何をいうても見せやうが遅い。」「イヤ落ちますミ直に申して上げました。」「イヤ、手後れぢや。もちつと早う見せればよいから。」それでもさうも前びろから落ちることは知れませんが、「イヤ落ちぬ内に呼びにおせばよかつた。さうするとこんなことはない。」と申

したといふことが御座りますが、成程「良醫は、未だ病まざるを治す。」というて、醫者の名人といふは、未だ病の起らぬ前に見て取るが、眞の良醫といふもの、此の痰醫者のいふのがその處、「良醫は未だ病まざるを治し、良將は未だ亂れざるを治す」というて、名將といふものは成程さうして見ると、感心なことで御座ります。

今の痰醫者は名醫、落ちぬ中に氣を付けさへすれば、病ごいふものはない筈、おりやあぶな氣はない、おれは大丈夫、おれは氣遣ひないと思ふ油断から、一切の悪は起ります。子供衆などは取りわけ大事のこと、悪いことと思つて人に隠すことはせぬやうにすることぢや。悪いことは悪いことぢや知つて居ります。

石川五右衛門の釜入りの淨瑠璃に、五右衛門の言葉にも、「抑も盗人の初めは、啞から起る。」ミいうて、手習するにも、御師匠様の書いて呉れた通

石川五右衛門の淨瑠璃
釜淵双級
巴といふ題
目輔並木
宗輔の作七
文久二年
月廿一日
竹座にて初日
だをが初日

りに習うて居れば、何も恥かしいことも怖いこともないから、誰が見ても平気で習うて居られる所が、人形の首書いたり馬書いたりする時は、御師匠様は見ても居らぬか、誰ぞ覗いては居らぬか、後や前を見廻はして、誰も居らぬと、よし／＼と手本の方はうつちやつて置いて。坊主書いたり馬書いたりする、人が見て居らぬに手習するは、大きな損ちやと思ふから、筆くはへて情けたり、無駄書きしたりして居る。サアさうするに據なく嘘つかにやならぬやうになる。そこへ御師匠様が御座ると、膽を潰して、今まで書いた無駄書きの所を、向ふへちよいと刎ねて、知らぬ顔で、「いろはにほへと。」を正眞に習ふ。

御師匠様が「われは手本の通り習うたか。」「ハイ習ひました。」と嘘をつかねばならぬ。それが盗人になる初め、そこで石川五右衛門が、「盗人の初めは嘘から起る、嘘の初めは身持ちから。」というて、坊主や馬を書くは悪い

と知つて居るから、坊主を書かうとするに、跡先見て、御師匠様が居ぬとよい鹽梅と書き掛るが、泥坊の初めぢや。そこで嘘の初めは身持ちから。

若い御方に取りわけて、色狂ひ小博奕の約めを會はず帳面、筆の先、後には手先が働いて、主人や親のもの、他人のもの、一人の方人、二人の手先、三人四人と枝葉が付き、やめうといふに止められず、坂に車を押すごとく、心は先へ車は後、丁度猿が竹の子を盗むやうなもの。

私の國なごで猿が竹の子を盗むやうなことが御座ります。あれが賢いやうで馬鹿なもの、何にかそつと来て大きい竹の子を見付けても、一疋ぢや手に合はぬから、取付いて居て外の猿を呼ぶと、幾らか出て来て、その竹の子に取付いて、とんと御幣をかたけて振り立てるやうに猿がゆすぶる。そこは至つて賢い。さうすると段々と竹の根がゆるんで来る。仕舞ひに折れしなに、ほんと音がする。音のするを相圖に番人が出て来て打殺すとい

ふことは、此奴も知つて居るゆゑ、自分の耳へさへ聞えねば音はせぬものと心得居るから、右の通りゆすぶつて、その折れしなにほんといふ音のする時はちやつと耳を抑へて、おれは賢い。あの音がするから外の猿は打殺される。かうさへすれば音は聞えぬものを、外の猿は皆あほうぢや。おれは發明な賢いものぢや。是では知れまい。この位のことは大事なくくと耳を抑へて居る。

人間はえらう御座ります。ソコデ今の猿ぢや。耳をしつかり抑へて、そつとして、是ぢや知れぬ知れぬと思つて居ると、番人が今のほんといふ音を聞付けて、ソリヤ猿がうせたと、天秤棒をさけて出て見るこ、猿は一生懸命になつて、聞えぬやうにして居るからと思ひつめて居る所を、後の方へ番人が来て、手前は向ふの猿を打殺せ、おれはこちらの大きいのを打殺すから。」といへども、耳を塞けて居るから、人の來たのも物をいふも知ら

ず、おれは賢い。かう聞えぬやうにして居るから、叩れる氣遣ひはない。誰も知らぬ知らぬと思ふ内に、天道様や神佛がもうちやんと御存じで、おのれ悪い奴と、天秤棒がモウ爰らへ来て居ても一向知らぬ。悪いこととして知れぬといふことは決してない。隠してするから知れぬといふは凡夫の眼玉、隠すといふのが顯はれて知れてあるのぢや。明るい所も暗い所も、天道様がちやつと見て御座る。

ソコデ爰に昭烈皇帝が、「悪い小さいといふともするな。善は小さい善ぢやからというても、適さずせよ。」とおつしやつて御座ります。さうさへすれば、小さな善も段々積んで大善となり、悪も此の位は此の位はといつて、段々積るに遂に大悪となります。五倫の交りも不通からいいて、歌に、

慎みは朝夕なるる言の葉の

初ごこの上にこそあれ

口答へちや
とせいでち
やとふ然
て答へだ
ちするは
ぢやとふ
ぢやといふ
意

八七一
少しの言葉からも大事は起るもの、譬へていふと、女房を呼ぶにも、「かかよ。」と、いと優しくいふと、「アイ〜。」と女房も優しく返事する。「コレか何ぢやい。をどれ、きり〜せい。日の短かいのに。」といふと、「日の短いはわしぢやきて知つて居るが、人も来れば挨拶もせにやならず、洗濯ものもせにやならぬ。」とわしが手ぢやとて、五本も六本もありはせぬ。「夫に向つてツベコベ〜と口答へ、女「口答へぢやとてせいぢや。こんなも火燧へばつかかりかぢり付いて居ずも、もちと手傳はんせ。」亭「何とぬかす。こちや牛ぢやないぞ。亭主の鼻面へ綱を通して、引出さうと思つても、人間が違ふぞ。」と、大騒ぎになる。六尺の禪、めめた立派な男と、辨天様のやうな美しい女中が、赤くなつたり青くなつたりして、「己が様な引きすり尼は、ぶち殺しても飽きはない。」女「サア殺せ〜。殺してよければ殺さんせ。わしぢやとて、まんざら掃溜めから拾うて来たでもない。れつきこした親

神樂にぐら
を鳴らすも
と故に鈴音
だ。よんだの
口はこれ禍
の門は禍
に、口は詩
禍に、口は詩
は是身舌斬
あるは刀を
三寸の長舌
舌の長舌
ら、舌の長舌

も兄もある。殺してよければサア〜殺せ〜。「オオ殺す〜。」と大騒動も何から起るこいふと、
假初の言の葉草に風立ちて
露の此の身の置所なき
大きい處に慎しみは入らぬ。小さい所に慎しみといふことは御座りますぞ。今日家内の中の言葉遣ひでも、唯慎まねばなりません。
家内中なかのよいのが神がくら
高天が原に笑ひ鈴音
で御座ります。先づ一服上りませ。
前にもお咄し申しかけた通り、「口は是れ禍の門」というて、舌こいふものは、たつた三寸のかへし様でどんなことが起るやら知れぬ。
三寸の舌で五尺の體をば

定家卿
藤原定家卿
のことに
詳しく註
せり。
雑掌
給仕なり、
小使なり、
しつもの
つかひ。

養ひもする失ひもする

定家卿は名高い歌よみの名人、素より御公家様ぢやから、平生御歌をおよみなされる所が、十二三にもおなりなさる若殿様があつて、おとと様の御側に御出でなされると、障子が明けてあつて、風か吹き込むゆる、明りが消えさうになるから、その若殿様が、雑掌を呼んで、風か吹いて燈火が消えさうぢやから、障子をたてい。「こ仰付けらるるこ、私どもが聞いては、それで善ささうなものぢやが、定家卿御聞きなされて、甚だ御嫌わるく、「その方は歌の家に生れて、左様の言葉遣ひ致すは甚だ不心得申すもの、急度以來を慎しむやうに。」と御叱りなされたが、御側の人には何故あ言はつしやつたか。どこが悪るからうと一圓合點が行かぬゆる、後でそつと定家卿へ、「最前かやうくに仰られたは如何の思召で御座ります。」と御尋ね申したら、

それらは高
い所
身分高き人
の家のこと
と。いふこ
と。言葉多
品少し
童子教にあ

『さればあれでは歌讀みにはなられまい。平生の心掛が悪い故ぢや。なぜと申せば、言葉數が多い。一ついうてよいことを三ツいうたゆる咎めたのぢや。「障子させよ。」といふばかりでよい。風が吹くも、燈火が消えるといふも、入らぬことぢや。その様な言葉づかひするやうでは、名歌をよむこゝはむづかしい。』と仰せられたと申すこゝが御座ります。言葉大などといふは、先づ此の位のものぢやが、それらは高い所、しかし「言葉多きは品少し。」というて、私などのやうに、こんなにべちやくちや、べちやくちやさしやべるものは心の知れたもの。

知らぬこゝ知つた顔して言はしやるな
口を開くと腸が見ゆ

詞といふは大事のもの、こかく何からといふも、心安だてがすぎると、ついで粗相な言葉も出る。それについて話が御座ります。

ある所に友達がなくなりましたから、悔みに行かうと思つてから、戸口へ這入りかけて内の様子を見るに、女房はまだ廿四五の女、モウ佛を棺桶へ入れて、何もかも仕舞ひまして、佛壇の前へ据ゑて置き、その新後家が棺へ取付いて、しくくと泣いて居る、扱もくいとしいこゝ、若い身のさうして夫に離れて、さぞ頼みすくなからう、泣くも尤のことぢや。悪い所へ来た。這入るにも這入れず、困つたものと戸口に考へて居た所、後家は前後を見廻はして泣き沈んで居るが、斬てすつと立つて髪剃刀を持ち、佛壇の前で手合せをする様子ゆゑ、南無三三三や自害でもするかと思ひ、大變なことぢや。もしやさうあらば止めうこ、腕まくりして待つて居た所が、その髪剃刀を其所へ置いて、結んだ髪をほどいて、根元を握つた所、誠に眞黒でそして至つて長い美しい髪を、惜氣もなく根本からすつくり切りとつて、其のまま棺桶へ投入れんとして、何か小さい聲でいふを聞けば、

一首の歌に、

長かれと思ふ命は短かくて

伸びて詮なき髪のがきよ

髪かみの長ながいに就ついて夫おとこの壽命じゆみんの短みぢかきを歎なげいて讀よんだ歌うた、それを聞くと、さてもく優やさしい女おんなと思おもひ、此この男おとこもしくくと貰もらひ泣なき、こんな時とき來きずと、又また今度こんどのことことにしやうと思おもつて歸かへりながらも、扱さてもく感かん心しんなこゝ、内うちへ歸かへつたら、女房にようぼうに咄はなして感かん心しんさせやうと思おもひ思おもひ、わが内うちへ這はい入いるこゝ、「コレ鼻かよ、今日こんにち權ごん八はちの所ところへ悔くやみに行いつたら、かうくぢや。イヤもう優やさしい女おんな」といふと、嗚なも感かん心しんしようと思おもうた所ところ、大格おほり氣きものゆゑ、「お前は又またしても又またしても、人の所ところの女房にようぼうをばかり褒ほめて、聞ききたくもない、置おかしやんせ、大事だいじな亭主ていしゆが死しんだもの、泣なかいは。亭てい「イヤそれから髪かみを切きつて棺くわんへ入れた。」女房にようぼう「それぢやとて切きらいでは。」亭てい「さうしてマア優やさしい

四つ時の鐘の
夜の十時の
鐘のこと

「こはサ、かうくいふ歌をよんだ。」

女房、「何ぢやとよい氣な、大事な亭主が死んだといふに、歌どころか
い、よい氣な女ぢや。そんな氣に三日もなつたら、嘸面白からう。」亭「そ
れぢやきてマア何時の間に心得たことやら知れんぢやが、歌をよむといふ
は感心なこと。女房、「何わたしぢやきて讀まいで。」亭「どうして我れがよ
まれるものかい。」女「よんで見せう。」亭「そんなら今爰で讀んで見い。」
女「よまいでは、そんならマアこなた死んで見い。」こいふ。亭「阿房いへ、
死なねば讀まぬといふやうな歌よみがあるものか。どうしてく我等など
の齒に立つものかい。女「何その位のことはいはいで。亭「そんならい
うて見い。」「オオよまいでは。」互に争ふ内に、夏の夜なれば四ツの鐘。
女房は頬ふくらしして腹立ちまぎれに寢床を敷くに、寢莫座は少し短いに、
亭主は至つて脊の高い男で、足が長いから、何時も足が餘つて、莫座の外

我等といふ
汝等といふ
に同じ。

へ出るを思ひ出して、「コレお前をよんだ歌が出来た。」亭「ソナラ何とよ
んだ。」女とりあへず、

長かれと思ふ寢莫座は短くて

入らぬ亭主の足の長さよ

と申したさいふことが御座りますが、此の女には限らぬ。随分幾らも亭主
の足を切りたがる女房が御座ります。

子にも随分御座ります。親父の足を切りたがるが幾らもある。「コレ長松、
見世の算用はして仕舞うたか。」「ハイく」というて居れど、何の入らぬ
差圖、ここに如在かあるものかえ。引込んで佛なぶりして居るが年寄のあ
たりまへと、扱も親父の足の長さよと、切りたがる。奉公人は旦那の足を
切りたがる。嫁は姑の足を切りたがる。どれも皆逆立ちして居るのぢや。
皆これが禍の根といふもの。その禍は何から起るこいふと、みんな此の位

取不捨衆生 如來眞身 千八萬四 光明大なる 明に念佛 取捨を攝 事い淨土 念ふ語宗 念佛無間 他宗上人 日蓮上人 他宗を撃 あり念佛 歌は無間 禪宗は地

は大事な、此の位は善さうなものといふから起る。

それ故に神道佛道儒道の教がある。みんな自身に立歸つて見て、少しでも私の心あらば、是は恐ろしいことと思はば、早くその心を捨て、本心の通りにするばかり、諸悪莫作、衆善奉行より外には教はない。南無阿彌陀佛も南無妙法蓮華經も、言葉のいひやうが違へば、別のことのやうに思ふが、同じ道、親に孝、主人に忠、夫婦和合、兄弟睦まじく、朋友に信を盡すより外に道はない。それを行はせう爲の三教、別々のものぢやない。道は一つのもの。

此の扇をそこにあるに教へる指は、さうさします。こちらの方から指せば、此のやうに右から左へ向く。こちらから指せば左から右へ向く。向ふからは私の方へ指を向ける。私の方からは向ふへ向ける。上からは下へ向ける。下からは上へ向ける。たつた一つの扇でも、その人の居る所から指す指は、向きやうがみんな違ふ。

たつた一つの道で、五倫五常は三國にも貫いた人道、どうぞそれを知らさう爲の教、南無阿彌陀佛といふ指もあれば、南無妙法蓮華經といふ指もあり、指の向きやうが違ふと、指す所も違ふと思ふが、指には用がない。目ざす所は、人の道を行はたいばかり、指はどうでもよい。此の扇の大道に目がつけばよい。指ばかり較べて見るから喧嘩が出来る。

こちらの指は「念佛衆生攝取不捨の此の上もないありがたい指。」といふも、向ふからは「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、他宗無得道、法華一人の成佛。」と指を出し較べると、「イヤ天然などの汚らはしい教、祓ひ給へ清め給へ、おこんころく。」といふ指も出て、互に指の較べ合ひ、「大道無門、千差有道。」とぶつぐわんにも出てあつて、小道の千差萬別に分れたるも、約る所は此の扇の大道を知らせたいばかり、「イヤおれの方の法華は諸

天魔に取居り
付かれ宗居
は亡國に凡
る賊律宗は
國の道に
て宗は道に
他宗は道に
得て居るに
といふこと

一・念・彌・陀・佛
即・念・彌・陀・佛
心・を・散・亂・罪
ず・阿・彌・陀・佛
を・念・ず・れ・ば
重・い・か・ら・ん
忽・ち・消・滅・す
て・餘・の・所・な
彌・陀・佛・の・誓

願の然らし
むる所なり
との意なり

經最第一の此の上もない尊い宗旨。「イヤ我が方の念佛は、一念彌陀佛、即滅無量罪の、佛様の御誓言に違ひはない。」と、人を迷はせ地獄へ落して苦くませる教もない。

何の爲に教といふものはあるぞいふと、どうぞ人の迷ひを取つてやりたい計り、何もむつかしいものではない。人々持つて生れたものを知るのぢやから、いろはのいの字知らいでも出来ますことで、別に辨明でなければ出来ぬといふでもなし。只我が身を捨て、親父の儘になるが孝、主人の儘になるが忠といふ。女は頭の上から足の先まで、夫のままになるが貞と申すばかり、外に何も知ることは入らぬ。

御當所に、昔、車力の權八といふものが御座りましたが、勿論主として賤しい働をするものゆゑ、別にこれといふ樂しむらしいこともなく、女房を持つて、初めは睦ましく暮して居ましたが、人といふものは至つて大事な

もの、モウ米櫃に少し米の溜るやうになると、慎しみがぬける。又夫婦の仲も、年を重ねて互に心安だてが過ぎるから、初の志は忘れて、夫に言葉返しするやうになるが世間の女夫いさかひの辯で御座ります。

處が此の權八の女房はさうでない。至つて正直で柔和な性質、そして堪忍強い女。權八はそろく道樂を始め、博奕を打つて我が儘もの、その内に外の女に馴染が出来て、内の女房は嫌になり、外の女の方へ夜も晝も通うて通うて、通ひづめ、さうくは女房を出して、その女を内へ入れたいこいふ迷ひが出たれども、内には生えぬけの女房で、何も咎もないゆゑ、まんざら出て行けこもいはれず、どうぞして出したいと思ふ心から見るによつて、見れば見る程嫌になる。

今では内に少しも落ちついて居るが嫌になるゆゑ、外を家こして、只ぶらりくさのらついで、滅多に内に寄付かぬが、妻は至つて堪忍強い性質

神。是が鈿女命で、權八は貧乏神。どうしても女房はにこ〜こして居る。どうがなして權八は腹を立てさせたく思ふ故、いろ〜と思案の餘り、コリヤ歌をよんで腹を立てさせんと思つて、何でも女いふものは、己が姿のこゝを悪くいはれるこゝ、どんなものでも腹を立てるこゝ思つて、火燧に仰向きになつて、女房の立居振舞をぢつと見て、あの頼わい見たくでもない。いま〜しい女、女房の器量のいひ分を段々と考へて居る。

まづ一番に色が黒い、煤掃きした様な面で、鼻はちつくり低い鼻、尻は大きく、大阪白の如く、段々考へて、よ〜〜これを一詠んでやる。幾ら堪忍強いといふこゝも、これでは腹を立てるであらう。立てたら直にお拂ひ箱と胸を据ゑて、「コレ嗅チヨト爰へ來い。」と呼寄せて、「これ先から我が顔を見て居たら、胸糞が悪くなつたから、歌を詠んだ。」といふと、「ハイそれはお恥かしう御座りますが、そしてマア私を歌によんで下さるは有りがた

う御座ります。」「イヤ有りがたい歌ぢやない。マアかうぢや。」

やきもちや焼かねど顔がくすほりて

鼻はひしやけて尻はほつてり

なんとどうだ。是ではと思つた所が、やつぱりにつこりと笑ふ顔を赤くして、「お恥かしう御座ります。」と俯いて居るばかりで、腹を立てぬ。どうぞして思ふから、「コレ嗅よ、歌をよませて、御恥しいぢや濟まぬ。何じも返歌しろ。返歌をせぬと叩き出すぞ。」女房「ソレデモ私は歌といふもの詠んだこゝは御座りません。どうぞ御許し下されませ。」涙を流して詫言すれども。爰ぞ思つて、亭主「よまずば出て行け、居りたくばサア返歌しろ。今直ぐによめ。サアよめ。サア返歌しろ。」責められても、女房はつひぞ歌といふものはどんなものか知らぬゆゑ、困り切つて涙が出るばかり、一言も出やせぬ。只手をついて、「どうも歌とやら、仰に背きますまい。

是ばかりはどうぞ御許し下され。」と這ひかがんで断り言へさも、決して聞かぬゆる。「どうもせひがない。暫く待つて下され。さうおつしやらるることなら、今宵一ト夜さ考へさせて下されましたら、ありがたう御座ります。」と泣きながらいふゆる。流石の権八も、「そんなら今宵は許すから、屹度よめ。よめぬと直ぐに叩き出す。」といふを力に考へて居たが、どうぞ今の歌をもう一遍いうて聞かせて下されまし。権八

やきもちには焼かねど顔はくすほりて

鼻はひしやけて尻はほつてり

「ハイ。」というて考へて居ました所が、信實から出るものは怖いもの。頼て権八の前に来て、「やうくよみました。是でよう御座りますか。」どうぞ聞いて下さりまし。返歌といふものになりませうか。なるなら是は御了簡なされて下されまし。」といふ。そこで何とよんだ。定めて腹立ちのことが

交つてあらうと、耳をすまして聞いて居ると、あら「有りがたや。」といふ上の五文字を聞くに、はてなと思ひがけないことと思へども、猶もそのあとを聞くに、

有りがたや姿笑うて心をば

許し給はる君がなさは

こいひました 前の権八の歌は疑はしいものなれども、此の歌は眞實で御座ります。歌の心は、姿のことばかりを悪くいうたばかり、私どもの心も姿も同じやうに穢い見悪い心なれども、そこは言はずに許して下さるといふは、夫の情、さてもくありがたいといふ歌、所がその歌に感心して、悪に強い善にも強いというて、さうく心が入代りて「扱もくそなたはさうまで辛抱強いものであつたか。皆おれが無理ばかり、さうぞく許してくれ。」というて本心に立返つて、元の通りに睦まじく、夫婦を合せ

て精出して稼ぎましたから、幾久しく榮えましたさいふことで御座ります
 が、大事くと慎しみの心を以て居らねば、有りがたやの言葉は出ませぬ。
 それ故にこそ亭主の邪見の角はほつきり折れて仕舞ました。けれご亭主
 が福の神になつたから、長く榮えて、目出たい身分になりました。ひよつ
 さま爰が一つ間違うと、露の此の身の置さどころなし。平生を大事人事とい
 ふを踏まへて、少しのこみでも曲つたことのないやうに、悪いと思ふこみ
 はよしにして、その代り善いと思ふことは、少しのことでも捨て置かず
 るやうにしますが、人の今日の心掛の大切の處、その爲に、漢の昭烈、後
 嗣に告げて曰く、「惡の小なるを以て之を爲すことなかれ。善の小なるを以
 て爲さざることなかれ。」に常に大事くの敬ひを失はぬやうにとお跡取り
 への右がたい御遺言で御座ります。
 前にも申した通り、大川の水も奥山から落ちた松や露や萩の雫が積り積

りて、大船を浮べる大川さはなります。梁や柱になる木も元は口髭位の芽
 生え、

數萬石積み重ねたる米俵

もと一粒の種子にぞありける

大船に大層積んだ米も、元は一粒が二粒三粒と積つて、一合となり一升と
 なり、一斗となり一石となり、千石にも萬石にもなつたもの、町家の身代
 でも、一度に出来た株家督、金銀ぢやない。先祖の功を捜して見ると、一
 錢二錢の段々に溜つたもの、善事も惡事もその通り、少し許りのことが溜
 つて、大善にも大惡にもなつたもの、

先年當舎にも下られまして暫らく居られた道輔先生に申すは、道二先生
 の御子息、至つて道話の上手な御人で御座りまして、その御方が大阪に居
 られた時、堺の住吉の社家の中にも、大分社中が大勢集つて、道の話して

道輔先生
 中澤道二の
 子なり

八万四千の
地獄衆生に
一切衆生に
八萬四千萬
煩惱ありて
つて悪業を
を造り悪業
の悪業をよ
りて苦果を
感ぜざるを
ば八萬四千萬
の塵勞煩惱
に應せしがた
めんがたし
めんがたし
八萬地獄の
稱あるのな
り。瑠璃松の
淨瑠璃に八
萬地獄と八
萬地獄と八
萬地獄と八
ふ。りし略

徳本上人の
前場翁道
話の所に詳
しく注した

るもの。もし本真に金があると遣る氣ぢやと、今から三ばい食ふ飯も一杯残して表へ立つ乞食にやり、十文のもの買ふにも一文は残して非人にやり、十文のもの買ふなら一匁不せうして、その一匁を施すやうにする筈、お前は其所を令して御座るか。さうしてさへ居れば、別に百兩施すにや及ばぬ。それでも同じこと。お前ばかりぢやない。さう思ふは凡夫の常ぢや。貧乏の中からも、出来ぬ所を縁へて僅なりとも施せば、それで千兩百兩施したと何も變つたことではない。兎角大きいことばかり思ふから違ふ。小さいことを思ふが早手廻ぢや。」と申されました。

成程面白いこと。此方で小さいことと思ふが、取りも直さず大きいことと氣が付くとよい。此の位のわるさもよいと思ふものから、八萬四千の地獄を拵へ出す。佛法で地獄極樂といふものが、向ふにちやんと拵へ構へてあるは、此の世に人間の善を爲し惡を爲す影法師ぢや。

此の心學の社中に、入江彌左衛門といふ人は、もと紀州の生れで、能く修行の出来た人、或時徳本上人が京へ上られた時、彌左衛門が参つて、どうぞ何ぞ尋ねて見たいと思つて、色々考へて見ましたが、是ぞこいいうて聞いて見やうと思ふこともなかつたが、ふと思ひ出して、「モウシ和尚様、あの人間が善いことすりや極樂へ行きて、悪いことすりや地獄へ落ちるといふが、兎角悪いところが多ゆる、地獄へ行くが多い勝手、それを如來様が不便に思つて、端から端から地獄へ落ちる衆生を救ひ取つて、助けて下さると申しますが、さうで御座りますか。和尚「いかにもさやう。」「入江、「成程私もおさやう存じて居ります。爰に一つ不審なところが御座ります。凡夫の考では、それは駄目なことをしたものぢやと存じます。なぜとならば、そのやうに端から端から助けても、段々跡から出来る人間、先ぐりぐりあとかから悪いところをしては地獄へ落ち落ちする夥しい人間、限りのないところ

十方・法界・一切・衆生・色心・本體・なり・起信・論に・心是・眞如・は一・法界・大總・和法・門體・とあり・然らば・宇宙・の一切・法界・内悉く・あらざる・ものなし。

それよりは阿彌陀の力で、地獄や潰して仕舞つたら、面倒なことは入らぬ譯、阿彌陀様の力でも地獄はどうも潰されぬもので御座りますか。」と聞いたら、徳本一人感心して、「コリヤ面白い。つひぞそんなこと今迄聞いたものがない。おれも大きに發明したことがあるというて、短冊を取つて、迷うから地獄や餓鬼はあるものを

十方法界みだのふまころ

と書いて彌左衛門へくれたを、私へも出して見せました。成程地獄極樂といふと、子供が金魚飼ふにでも、すくふに、さでを拵へて抄ふやうなことでもあると思つて居る、決して向ふに拵へて待受けて居るではない。地獄はみんな凡夫が我が手に拵へるのぢや。夫ゆゑ地獄には造地獄といふ。造極樂といふはない。極樂は人間の生れついたものゆゑ、常任の極樂といひます。小さな罪咎が積りく、重りく、地獄といふものが出来て苦しむ。

造極樂・前に・屢々・註せり。
 常住の極樂・化のいふこと・をいふ。
 食・瞋・痴・佛・教の・語、
 と・怒ると、
 ぐち・なる・と
 の・三つをい
 ふ。
 道林・禪師・が・書く
 鳥・巢・と・い
 う・が、
 鳥・巢・は・今
 林・寺・故・趾
 と・いふ
 あり・て・う

貪嗔痴の迷ひから出来たもの、そこで地獄はあるものともないものともいひます。

ありといふ人に地獄はなかりけり
 なしと思へる人にこそあれ

大事くと慎しむ人には地獄はない。何しに地獄はあるものかといふ人には、必ず御座ります。それゆゑッしのごきでも善心付かば爲、惡と心付かば除しさへすればよし。三教の教へもこれより外にはない。勸善懲惡ばかりのもの。

道林禪師といふ人は、唐でも大徳の人で、平生松の木のの上に座をかいて座禪して居た故、人が鳥巢相尙と申したといひます。白樂大といふ人が、その尊徳を慕ひまして尋ねて参りました。その時は白樂天は或る諸侯の大で、供も大勢連れて行きました所、例の通り高い松の枝の上に巢をか

くわぜんじ
のここと、と
りすおしや
うで、はな
い。

て居つた故、下から、「扱もく、危い所に居給ふものかな。」と申すに、道林禪師がからく、「笑うて、「汝我を見れば危く思ふべし、「我又汝を見るに、危きこと甚し。」白樂天、「我は當時大夫の官に在つて、人をも多く召連れたれば、少しも危いことではありませんか。」禪師、「その心が危い。汝、徳もななく道も知らず、又智もなし。その上、大夫の官に登つて、一國の政事を掌の中に自由にする。且つ大勢の家來を召使つて、若し一念過ある時は、汝ばかりでなく家來から一國中まで、不時の難義を受くることあるまじいともいはれず。我は斯く高き枝の上にあれども、落ちざるやうに巢の根を書いて座禪をする。若し落つるごも一個の禍にて、他に害を及ぼさず。」と申したら、さすがに白樂天大に感心して、如何にもありがたき御示し、連ものことに仰卒佛道の大意を御示し下されませ。」と申したら、

禪師、「諸惡莫作、衆善奉行。」と答へますに、白樂天からく、「と笑つて、

それは三才の童子も知ることぢや。」といふに、禪師が「三才の童子も知ること易し、八十の老翁も行ふこと難し。」と申しました通り、善事をして惡事をよしさへすれば、外に何も入らぬこと、

孔子様が御弟子方とある墓の前を御通りなされた時、あの墓は誰の墓で御座りますか、「と問ひましたら、「樂康子といふものの墓ぢや。」と仰せられた所が、御弟子が、「その樂康子と申す人はどのやうな行ひの人で御座りますか。」と御尋ね申したら、孔子様が、「善を善とし、惡を惡とした人ぢや。」と御答へなされた所、御弟子が、そんな人がなぜ子孫に祭る人もないやうになりましたらうか。「と申しましたら、孔子様が、「知りは知れどもたしなまぬゆゑぢや。」と仰せられたことが御座ります。私も忘れましたが、慥か樂康子と申しました。

さうして見ますると、三教ごも勸善懲惡より外に教はない。それゆゑ

この邊から
小野小町
川新左衛門
の事あり
またの堂々
方は去り
論者として
讚嘆せしむ
るに足るも
のがある
體より見
れば鳩翁
話で居る様
つてあるが
しかし掉尾
の大聲疾呼
生死解脱を
は、鳩翁に
は、見ること
の出来ない

奇妙の點が
邊は取つて
以て修身致
科書の一章
とするに足
る好材料で
ある。
入我我入
非常の面
なる教理な
り。詳しく
は三平等觀
を説かねば
解らざれば
諸佛の我入
身中に引入
れ、我佛に
我亦諸佛に
入る(我入)
の意。即ち
如来、三密
が(身、意、

どのやうなものを善といひ惡いふと申すことを、吟味せねばなりません。此の善の惡のといふものは、元こしらへて向ふにあるものぢやない。皆あとから付けた名、全體人の性は善なりで、惡といふものはない筈、すつぱり善の中に包まれて居るものぢや。世界が丸で善ばかり、惡といふは何を指して惡いふといへば、此の五尺の體を可愛ゆがるといふは惡の元締で、是が根となりたもの、是れから何事にも得手勝手が出て、世界の防げをするやうになるから、惡いふ名が付いたのぢや。人々形こそ別々なれ、心は平等一枚なもので、心から見れば人も我も隔てはないもの、もと一體のものゆゑ一體の通りに行けばそれで善い所を、此の我といふものが出ると、人と我と別々になる。此の扇のかう眞直になつた所が、平等一枚の所、是を我の方を押上げるこ、こちらの方は下がる。此の要の方が我で、地紙の方が世界、我が身の要の方を可愛ゆがつて押上

ゆると、地紙の方が下る。全體機が身が即ち世界、世界が即ち我、こころが入我我入といふ所、それゆゑ我を可愛ゆがるが世界の人を賤しむのぢや。君子は温良恭儉讓とて、温とは春の日のやうにむつくりと長閑で、力みのないこと、良とは賢いこと、裏表貫いたこと。恭とはうやくしく、儉とは儉約で、讓とは人にへり下ること、それゆゑ孔子様の御徳は、世界の人が今に至るまでありがたがる。銘々どもは中々さうは行かぬ。女房が少し小言をいふと、モウ額に筋を出して、腹を立つし、モウ世界が別々になる。己が分限に過ぎて傲るは世界を取りこむものになる。己が方を樂にするこ、世界を苦しむるのぢや。凡て世界の妨になる所を惡いふ名が付くのぢや。少しも我といふものなく、世界の助けになる所へ善といふ名が付く。五倫五常といふと大層に聞えるが、何もむつかしいことぢやない。至つて手

口の所作、佛に入り、一切諸佛の功德を我が身に具足し、我も亦諸佛の身中に入つて命するの意平。等と稱す。温良恭儉讓論語、而篇にあり。良とは云々。この説誤りなり。易直と譯し、易直と譯らるかにすなはなることといふ。

小野小町、六人絶仁、美人絶仁、明天皇頃、關曲小町、小野小町、い衰へて、寺の邊り、住みしを、遊の譽れ、夕祭りに、寺に招か、舞を舞ふ、ものを作つた。

近い見安いこと。只、今日親切に親を大事にする所へ孝といふ名づ付き、御主人様を大切に思ふ所へ忠といふ名が付いたもの。女房は夫を大切に、一念もし過ちて自身を可愛ゆるが惡といふもの、どうぞ御修行なされて、本心を御知りなされると、そこが直に分ります。赤子の時は御互に惡いふものは微塵もないゆゑ、世界の邪魔にもならず、人我の隔てが少しもないゆゑ、私のやうなものでも、赤子の時はかはやらしいもの、それが段々成人するにつれて、我が了簡といふものが出来て、世の中を何事も我が思はくを通りにしたく、何でも思はくを通りに行くものちやよ思ひ込んで居る。心學を修行して本心を知るべきには、成程我が思はくといふものは、役に立たぬものちやと知れます。我が子、我が女房、我が家來は勿論、我が身のことでも、一つも思はく通りにや行かぬ

もの、誰でも長生して何時までも若い時のやうで居たいけれども、月日に關守がないゆゑ、一つ／＼と年をとらねばならぬ。小野小町が朝夕鏡で己が顔を見て、扱も美しいと已れて、死ぬるは仕方がないが、どうぞ年が寄つて顔かたちの變らぬやうにしたいといふことを、

おもかけの變らで年の横れかし
たとへ命に限りありとも

かういふ歌をよむ中にも年が寄る。とう／＼仕舞は關寺小町のやうな乞食婆にならにやならぬ。それゆゑ蜷川新左衛門、此の歌を見て、

佛のかはらぬ時はいかばかり
變りてだにも惜しき命を

幾ら命を惜しがつても、新左衛門も死ぬ時には死ぬ。それゆゑ一休がまた、佛の變らばかはれ年も寄れ

鎌川新左衛門親當、足利幕府に仕へて伊勢守と成る。善く和歌を善く和歌を巧みなり。心向の第一。和向の第一。文安四年寂す。

水に剣を落し、呂氏春秋にあり。固執するもの、益なきことを譬へたこと。免過ぎて株を守り、韓非子に出づ。宋人に田を耕すも、のあり株あり。中、免走りに。死すに觸れ、つて不々守す。復免を、何んこと、而し。

無病息災死なばごつこり

あつらへ通りにや行かぬ。

生れるも死ぬるもあつち任せなり

あつちばつかりあつちばつかり

いやでも應でもごつとり行かにやならぬ身分。

或人が、どうぞ死ぬるなら頓死でござつとりやりたいと、平生の願ひで御座つた所、とうく思ふ通りに行きましたゆゑ、友達がよつて、「イヤ何處其處の八兵衛は奇妙ぢや。さうく望みの通りに行つた。」さうして、八兵衛の所へ悔みに行きて、「扱この八兵衛さのは、平生死が望みで御座つたが、よう望みの通りに行かれた。」と申したら、女房が、「成程さやうで御座ります。生きて居られたら、嘸喜ばれませう。」というた咄しが御座ります。

凡夫の世界は、逆も出来はせぬことを望んで、出来ぬというては氣を腐らせる。こんなことばかりで、一生を暮して仕舞ふ。丁度ある馬方があつて、小言いふには「爰の旦那のやうに、馬の好きさいふにも困つたものぢや。毎日馬に乗つて歩るかつしやるさいふ。又何處其處へ行くから、馬の仕度せいと云付けられ、イヤ困つたものぢやが、爰の内に馬と旦那がなければや已も入らぬ。」兎角凡夫は已か思惑通りにしたがる。僅のこゝでも今日一日に仕上けにやならぬと思ふことも、明日も明後日までもかかることもあり。あの人に用がある。どうぞ来ればよいと思ふ人は来ず、来ないでもよいと思ふ人は来る。物事すらりすらりと變るが當り前、何事も當りにはならぬ。
「世の中は水に剣を落して、舟端に刻む。兎過ぎて株を守る。」とかいって、さつくと流れる上で、舟から剣を落して、今度来て取らうと思つて、直

て兎を得ず
笑となつた
事。舊習に
拘泥するも
いふことを

に舟端に印を付けて置くやうなもの、すらりくと流れてゆく事には氣が
付かぬ。株のある所を駈つて通つたを見て居て、あの株の所が兎の通る所
ぢやと思つて、網を張りて待つて居るやうなもの、皆天道様と別々の世帯
を持つゆゑ、さうも天の流行任せにするこゝが出来ぬといふは、全く本心
こいふものを知らぬゆゑ、今日の境界がひとり狂言、本心を知ると今日の
ことが見た通り聞いた通りに行きます。

見ようと聞かうとも思ふとも思はぬけれども、ひとりでにその通りに
して居る。別に思慮分別を交へるにも及ばぬこゝで御座ります。後でチユ
ウ／＼はハア雀ちやと知れ、ニヤアいふと猫と知る。外をあるくにも、
今度は左の足、今度は右の足、どつこい大きな石、おふけにまたけにやな
らぬ、一々思はいても、すらり／＼ひとりでにあるかれる。それゆゑ少し
も思慮分別といふものさへなく、向ふままになつて居ると、親御に向へば

孝、主人に向へば忠となる。何もかも向ふ任せ、左様でさへあれば丸で
善の中にすつぱりと包まれて居るといふもので御座ります。先づ餘り長う
なりますゆゑ、今日はこれぎりに致します。

大正十二年三月十日印
大正十二年四月五日發行

刷行

定價全貳圓貳拾錢

著者

堤達也

發行者

東京市芝區白金三光町三三五
杉山元

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目五番地
川城時造

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目五番地
愛生舎印刷所

不許
複製

道話の泉奥附

發行所

東京市芝區白金三光町三三五
編輯東京三九一六九番

文誠社出版部